

# 新案福引



絵入地口百番

宝内

259

707

076394-000-4

特26-634

新案福引

中村 青江/編

M42

CEQ-0159



1917

1917

君今度新案福引といふ本を博文館で出版したが見

たかい福引の景物を謎にしたのさ夫ばかりぢやな

い上の欄には繪入の地口があつて下には座敷遊戯

の事がいろく出て居るよ早く購求て見たまへ面

白いせ

選歴の後

明治つちのと

七歳の童子

酉のとしの秋

幸堂得知

油置文にかへて

博文館

# 新案福引目次

## 本文目次

	題頁數	解頁數
○衣	裳……………(一)	(三)
○裝飾品及化粧品	……………(五)	(七)
○菓	子……………(九)	(七)
○果	物……………(二)	(八)
○魚	鳥……………(三)	(八)
○野	菜……………(一六)	(八)
○乾	物……………(一九)	(九)
○食	料……………(二)	(九)
○飲	品……………(二四)	(一〇)

### (上欄)

繪入地口百番	
(下欄)	
マツチ遊び	……………一
マツチ箱の寐床、マツチの三本橋、マツチ橋	
コップ遊び	……………八
コップの音楽、音楽と噴水	
キルク遊び	……………三
キルクの風車	
豆遊び	……………五
豆の家具	

○あ	ら	物……………(二七)	(二〇六)
○賣	藥	……………(三)	(二四)
○書	籍	……………(四)	(二八)
○文	具	……………(三六)	(二三)
○花	弁	……………(四)	(二八)
○玩	品	……………(四)	(三三)
○漆	器	……………(四九)	(四〇)
○金	物	……………(五)	(四二)
○陶	器	……………(五)	(四五)
○諸	具	……………(五六)	(四九)
○取	合	……………(五九)	(五四)
○雜	物	……………(六一)	(五七)

將基駒遊び	……………一五
とび將基、廻り將基、積み將基	
碁石遊び	……………二七
五目遊び、拾ひ物、卍字拾ひ、片根矢拾ひ、ならべ物、二つ飛	
カート遊び	……………三七
競走遊び、豌豆蠶豆、誰か知る、閉塞遊び	
歌カルタ遊び	……………七五
ちらし、組分け、源平、お伏せ、役札早取法	
花カルタ遊び	……………一〇六
花合せ	
トランプ遊び	……………一四
輪取り、ナホレオン、ソーテンシヤツク、ホイカー、	

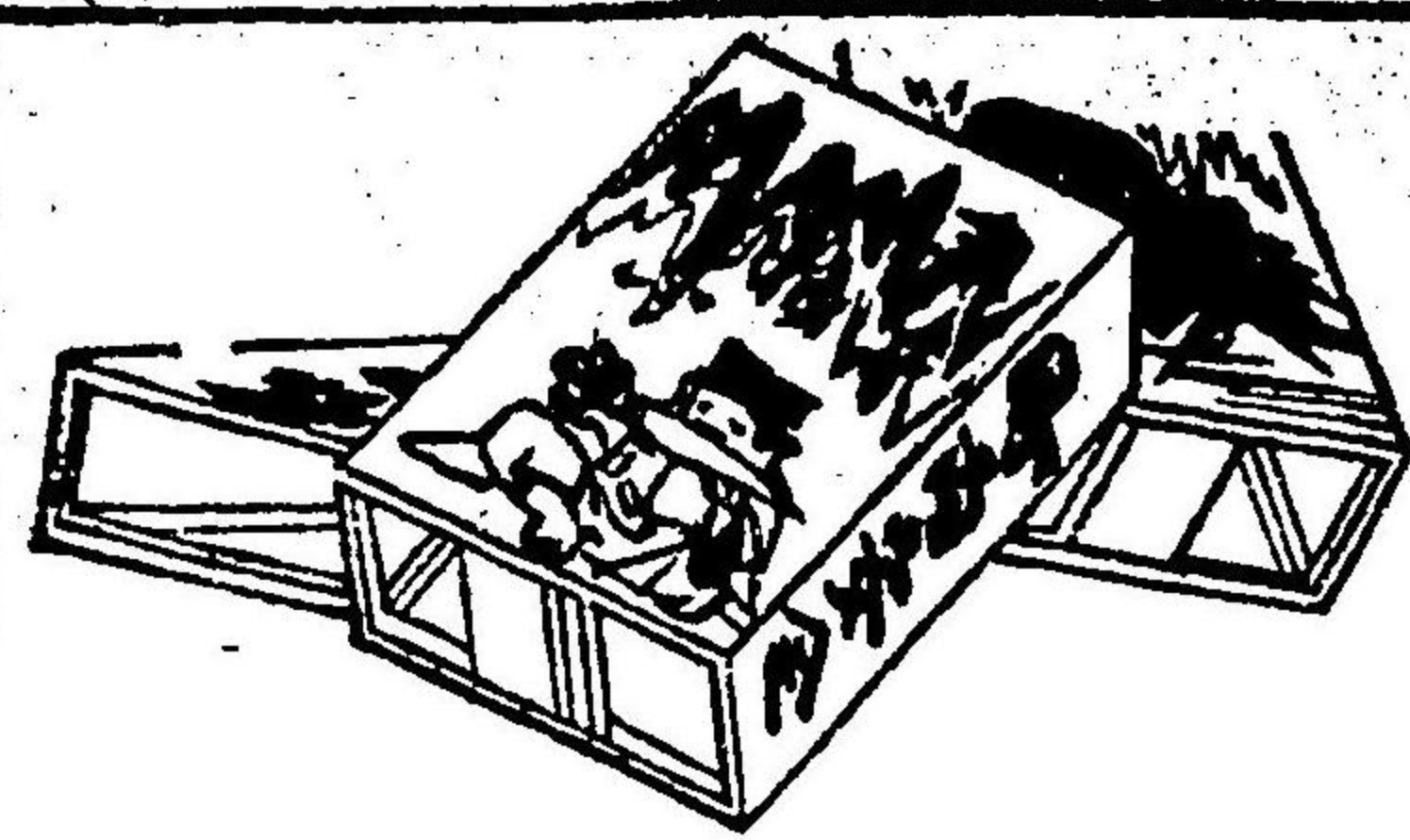
中背江君頃日福引集なる一書を作り其の稿本を僕に示された、元來この福引なるものは、起原を遠く天平の頃に發して居るので、その方法にも多少の變遷はあつた、要するに近世以前の福引は、景品其物に最も重きを置いたので、假へば千石以上の御家老が、天保錢一枚を引き當てたり、深窓の裡に育つた姫君に、大根一本が當つたりして、人と景品との對照の極めて妙なる處に興を催したものであつたが、當今では景品その物よりも、題に苦心をする様になつた、併しその題のつけ方たるや、頗る拙劣な極めたもので、淺薄なる語呂地口的にあらざれば、無意味の駄洒落に終つて居るので、興味索然たるものである。これでは却つて昔に戻つて、題し何も無くして、引當てる人と物品との對照に重きを置いた方が、感興としての價值はあるだらう。然るに背江君の本集を見ると、この點に大分注意してある様である、これならば福引集と立派に名乗つて、世に出しても差支はあるまい、時漸く年末に近いて来たから、忘年会から新年會にかけての席上で、餘興福引のある場合には、此書に依つて趣向を立てたら、必ずや一座をアツと言はせる事が出来よう、斯ういふ僕の前か、お世辭であるか否かは、論より附屬、やつて見るのが一番早い！

己酉十月初旬

變哲生識

新地口百番

寶馬窓作



新案福引

中背江編

題之部

表巻

- (一) 春の野
- (二) 秋の野
- (三) 達磨のお國
- (四) 梨壺の歌仙

地口百番

【題】表巻

室内遊戯

マツチ遊び

●●●●●●●●  
 マツチ箱の寢床  
 用意の品物はマツチ箱とマツチである、先づ明き箱の内廊の四隅に穴を穿け、其處へマツチを挿込下三分位

マツチ遊び



本文  
地口始まり

駄口  
耻なり

- (五) 一柳の藝
- (六) 寺男の掃除
- (七) 子供の着物
- (八) 紙入の袂紗
- (九) 豊公裂封冊
- (一〇) 親父の強意見
- (一一) 金庫
- (一二) しらすの森
- (一三) 電車の救助網
- (一四) 道楽番頭の横尻

を願し、上はマツチ丈の高さにしておき、さて更に短かきマツチ二本をかき、其上に左右並べ、共横に一本を結び、付けるのであるが箱に添ひし所は糊付とするのであるマツチの三本横品物は茶碗でもコ

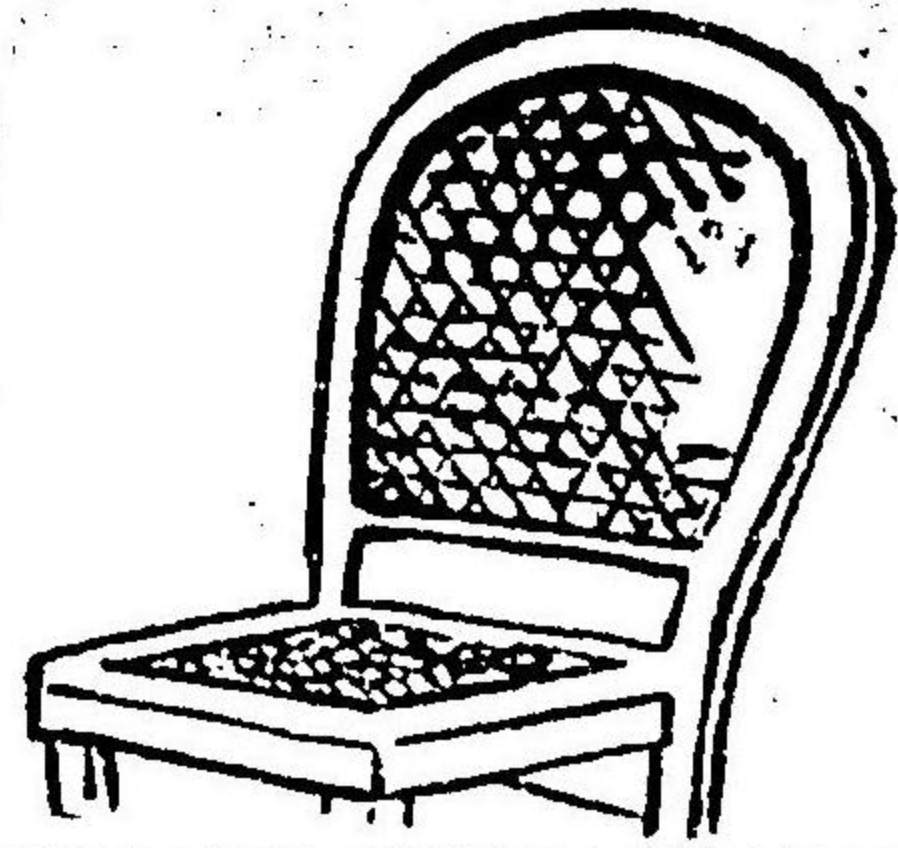
本文  
太閤秀吉



太鼓を  
桴で  
打つ

- (一五) 一ツばん
- (一六) 天神様
- (一七) 獨逸の志氣
- (一八) 油揚の御用心
- (一九) 路の角
- (二〇) 豚の尾
- (二一) いろ女
- (二二) ビラの半切
- (二三) 寺院の創設
- (二四) 蛙の面に水

ツブでも有合せものと、マツチ三本で造るのである、先づ三ツの茶碗を鼎の足の如くにならべて、最初甲の茶碗より乙の茶碗に一本のマツチを渡し、次に乙の茶碗より丙の茶碗に丙の茶碗より甲の



本文  
伊勢は津で  
もつ  
椅子は  
籐で持つ

- (二五) 寒稽古
- (二六) 支那新地圖
- (二七) 近衛の兵士
- (二八) 夏の富士
- (二九) 強意見の反響
- (三〇) 千三や
- (三一) 待合の警八風
- (三二) 人相見

茶碗に三本のマツチを渡し造るのであるが、其渡し方は甲ト乙トの時は甲の分の尖端は茶碗を離れる事が出来ない、乙ト丙トは亦乙の處の尖端を外れる事が出来ぬのである、此様に丙と甲の間を結

本文

鯛の頭も  
信心から



いぼじり  
頭も新  
ハイカラ

装飾品附化粧品

- (三一) 犬の小便
- (三二) 爲替入の書留
- (三三) 引かれ者の珠數
- (三四) 疊の本場
- (三五) 支那に電報
- (三六) けんくわの仲裁
- (三七) 病氣全快
- (三八) 御見事

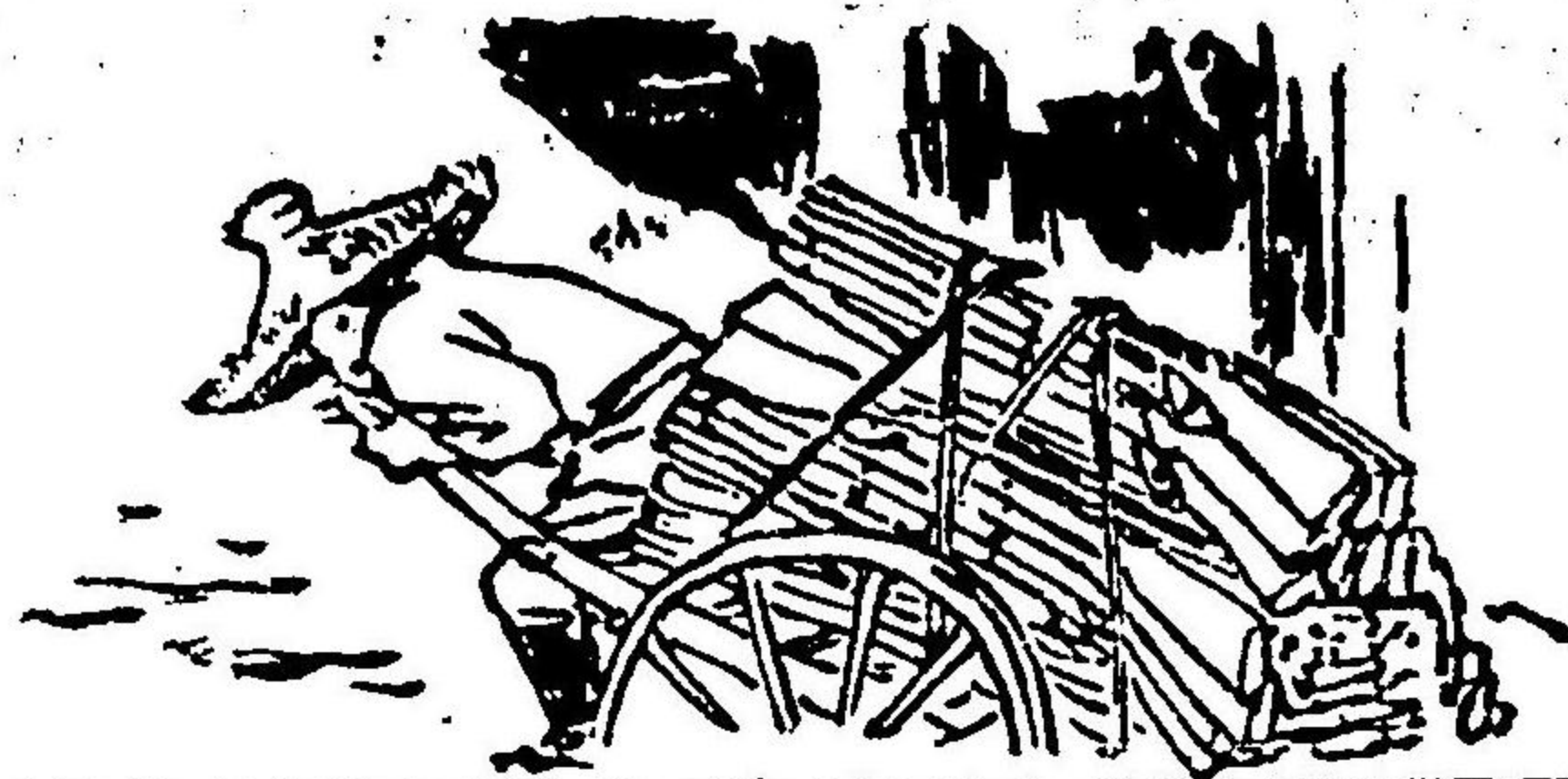
ばれしならば、此の上に茶碗なりコップなり載せても壊るゝ事はなく、立派な橋が出来上つたのである  
●●●●●  
マツチ橋  
マツチ橋は前に述べた三本橋とは違ひ至つて六ヶ敷ものであるが、腰に

本文  
釋迦に  
説法

坂に  
鐵砲

- (四) 生學問
- (四) 三十日の財布
- (四) お濠の魚釣
- (四) 年の暮
- (四) 世話場の柏子幕
- (四) 未来有望の青年
- (四) 海外漫遊
- (四) 鍍金術
- (四) 四ツ木の名花
- (五) 婿曳の宿

でも出来るものである、さてマツチの若干を用意して初めに二本の並行線を造り、其上に中央より稍、下の處へ一本の差渡しをなし、更に差渡ししたる直線の上より先きの並行二本線の外側に添へ第



- (五) 昔の書籍
- (五) 一ノ谷の戦
- (五) お姫様の小便
- (五) ペンキや
- (五) 抄紙部の女工
- (五) 煩悶者の最後
- (五) 紙子捻
- (五) 一寸の虫
- (五) 大當り
- (六) 水鳥の下血

二の並行線を作るので、かくの如く段々積重なるに従つて、大小思ひの儘なる橋は架設されるものである、が、此技は易きに似て容易ならぬものである故に術者は先充分に氣を落付けるの必要が肝





本文  
兩手に花



龍手

に鮎

【題】菓子

- (七九) お客にたまされる藪者
- (八〇) 秋の蟬
- (八一) 鐵筋の煉瓦建
- (八二) 夏の雲
- (八三) 冬の雨
- (八四) 名月
- (八五) 芭蕉忌
- (八六) 靴の原料
- (八七) 大波濤
- (八八) 一人息子の母親

コップ遊び

其コップに水を充分に満たし濕したる指にてクルクルとコップの縁を擦るのである、さうすると自然に美妙の音響を發しまするが尙續けさまに擦ると今度は水面に小波を漣へる尙も指先の暑さを

本文  
宮城野  
信夫  
葱の土産



菓物

- (八九) 以下次號
- (九〇) 出版豫告
- (九一) いさな藝人
- (九二) 蟬丸法師
- (九三) 徳利の名残
- (九四) アレ／＼赤きこしまきは
- (九五) 暗中の尋問
- (九六) 支那の人足

【題】菓物

キルク遊び

渡ぎ、盛んに續けると先きの美妙なる音響は何處よりもなく、音楽となり水面に水煙りを高く飛ばすの大奇観、大壯觀を呈するのである

- キルクの風車
- キルク遊び

(九七) 世襲財産

(九八) 沙漠

(九九) 席順の講讀

(一〇〇) 貸借の争ひ

(一〇一) 結婚の故障

(一〇二) 野武士

(一〇三) 腰巻をせぬ女

(一〇四) 赤兒の小便

(一〇五) 待宵

本文  
織田信長

櫓の

歩長

これはビールなり

葡萄酒なり何んに

てもよいがその栓

となつて居るキルク

を土臺として種

種の遊びをなすも

のである

先づ著手以前に用

意すべき品物は鶏

の羽少々と針金と

豆一粒とキルク鏝

或は三ツ目鏝を備

へねばならぬ、鏝

の必要なるはキルク

クの口に穴を穿け

る爲で針金は風車

の真棒である

先づ鏝にて針金の

太さ以上の穴を穿

けキルクの外側へ

鶏の羽を斜にとこ

ろくに挿し込み



魚鳥

(一〇六) 春の風

(一〇七) 唐辛

(一〇八) 湯上り

(一〇九) 結構な品

(一一〇) 一貫四百四十目

(一一一) くらなし

(一一二) 憂を拂ふ玉箒

(一一三) 上手な藝人

本文  
織田信長

櫓の  
歩長

- (九七) 世襲財産
- (九八) 沙漠
- (九九) 席順の講讀
- (一〇〇) 貸借の争ひ
- (一〇一) 結婚の故障
- (一〇二) 野武士
- (一〇三) 腰巻をせぬ女
- (一〇四) 赤兒の小便
- (一〇五) 待宵

これはビールなり  
葡萄酒なり何んに  
てもよいがその栓  
となつて居るキル  
クを土臺として種  
種の遊びをなすも  
のである  
先づ著手以前に用  
意すべき品物は鶏  
の羽少々と針金と  
豆一粒とキルク鏝



魚  
鳥

- (一〇六) 春の風
- (一〇七) 唐辛
- (一〇八) 湯上り
- (一〇九) 結構な品
- (一一〇) 一貫四百四十目
- (一一一) くちなし
- (一一二) 憂を拂ふ玉帯
- (一一三) 上手な藝人

或は三ツ目鏝を備  
へねばならぬ、鏝  
の必要なるはキル  
クの口に穴を穿け  
る爲で針金は風車  
の真棒である  
先づ鏝にて針金の  
太さ以上の穴を穿  
けキルクの外側へ  
鶏の羽を斜にとこ  
ろへに挿し込み

本文

店音

掻きの

風薫る

こセスが

行けば

風かほ  
る

(二四) 緋絨の鏡

(二五) 少將には

(二六) 子福長者

(二七) 十年の初産

(二八) 事實相違

(二九) おどけあそばす

(三〇) 不忠の家來

(三一) 落語家の前座

(三二) 情の深い里親

(三三) いかさまし

針金の先を曲げ穴  
に透し其尖端へ豆  
一粒をつけるので  
ある、これは車が  
廻りても飛び出さ  
ぬ用心である  
羽が多過ぎた爲め  
重く、風が弱かつ  
たりして充分の廻  
轉をせぬ事があれ  
ども、風の吹く所



(三四) 破れ障子  
(三五) 貧乏人の筆筒

福引の  
口上輕き  
男かな  
意氣

に置けば非常の速  
力を以て廻轉し仲  
仲に面白い遊戯で  
ある、殊に羽に彩  
色を施さば其廻轉  
の爲め非常に美觀  
を呈するものであ  
る

豆遊び

豆の家具

本文  
源九郎  
義経



銭食ふ  
お狐

野菜

- (二六) 赤鯛
- (二七) 扇の的
- (二八) 小原女
- (二九) 此上もなき仕合
- (三〇) 洗湯の祝砲
- (三一) 十八番
- (三二) 最早時間
- (三三) 神の司人

豆と小楊枝で色々の物を造るのである、最初豌豆なり大豆なり用ゆる品物を温湯に一晩ひたし柔かにして小楊枝は一方の端を尖らかし此柔かにした豆で椅子なり寝臺なり色々の物を造るのであるが



本文  
十九や  
二十

屑屋  
跣足

- (三四) 大阪
- (三五) 馬の脚
- (三六) 夜逃した番頭
- (三七) 夏冬の陣
- (三八) 兄弟商會
- (三九) 御信心
- (四〇) 南都の水害
- (四一) イカサマ師の口上
- (四二) 壽永の平家
- (四三) 名僧

茲には最も手易き椅子の造り方を説明する、さて最初豆八粒と小楊枝八本にて四角の土臺を作り、別に豆を五ツなり、六ツなり、串刺しし階子の如き者を作り、それを土臺の一端兩端の豆に刺し通

本文  
「兜あらため」

燕膏十  
あらため

- (一四) 酒宴中の喧嘩
- (一五) 溺死者の手當
- (一六) 九州の古名
- (一七) 正月の門飾
- (一八) 坐禪の達磨
- (一九) 隣の花
- (二〇) 酒宴中の亂舞
- (二一) 陳蔡の孔子
- (二二) なまくら武士の腰の物
- (二三) 隱居の他行

し懸掛より倚りかかる所を造るのである  
 其他の種類に付ては世界遊戯法大全に巻頭を乞ふ  
 将棋駒遊び  
 ●●●●●  
 とび將棋  
 先づ將棋盤に向ふたら一方は大駒斗り、一方は歩ばかりを各自の前の一番端の一筋に並べ



乾物

- (二四) 素人の謡曲會
- (二五) 兵士の魂
- (二六) 侍従長
- (二七) 在外の使臣
- (二八) 靈魂
- (二九) 下總の成田
- (三〇) 堀切の名物
- (三一) 紋形師

さて駒番を定めて賽(これは駒でよろしい)を振る、裏が出た時は金と云ふて二間づ、自分の駒を敵地に進める、若し表が出た時は一間しか進む事が出来ぬのである、かくして自分の駒を早く敵地





本文

平家の方に

て名高き

強弓

平氣の燻

にて

名高き酒

のみ

【題】食料品

- (一七九) 飢饉年
- (一八〇) 石川五右衛門
- (一八一) すすすす
- (一八二) 犬の股
- (一八三) 姫妃のお百
- (一八四) 韓國の濕氣
- (一八五) 棕櫚細工の盤
- (一八六) 支那
- (一八七) ペンのかけら
- (一八八) ふしだらけの薪木

将棊駒遊び

が十點、横に立つ  
と一個に付五點、  
縦に立つと一個に  
付十點、又縦に逆  
様に立つた時は一  
ツに付二十點、若  
しも盤面外に行く  
と零點、駒と駒が  
重なるると罰として  
一點づ、後戻りを  
する事である、か



【題】食料品

- (一八九) 西國の女
- (一九〇) 印度の饑饉

山風

福引に油断の  
ならぬ小娘の  
富てしもなかし  
小豆の豆

将棊駒遊び

く約束が結ばれた  
ならば各々四隅の  
一つを我が領分と  
して歩を一つ宛立  
て、金四枚を手に  
握り盤面の上に投  
出して約束の點數  
丈盤面の周圍を進  
むのである、かく  
の如く第二第三第  
四の人と順次に廻



本文

ほうし

啄木鳥の

帽子

は

好き



二〇九 死すべき時に死せざれば

餘興、福引趣向新。材料、善惡非所論。主人迎客無手技。小供集友欲得珍。抽籤張目期大利。開札香唾祈福神。奇想妙案真天外。拍手喝采如雨珠。灰殻令獲當播鉢。赤面深慮願如申。豐殼親父得香水。不欲落手與隣人。滑稽百出興不盡。甲乙丙丁評笑顔。

意にて平でも横でも縦でも逆でも差支へないが積まんとして倒れる事あれば倒れた丈自分が取らねばならぬので早く駒を無くしたものが勝利となるのである

善石遊び

あら物

- (三〇) 全勝力士
- (三一) ほとゝぎす
- (三二) 秋の雲
- (三三) 三社様
- (三四) 不寝番爺
- (三五) お半長右衛門
- (三六) A B C
- (三七) 大川端の家

五目遊び  
五目遊びは一般に行はれて居る故茲には述と説明を略するが此遊びに付注意すべき事を述べん、第一に石を下ろす際我れに利ありて敵に不利なる場所を考へねばならぬ事と目前の

本文  
月とすつほん



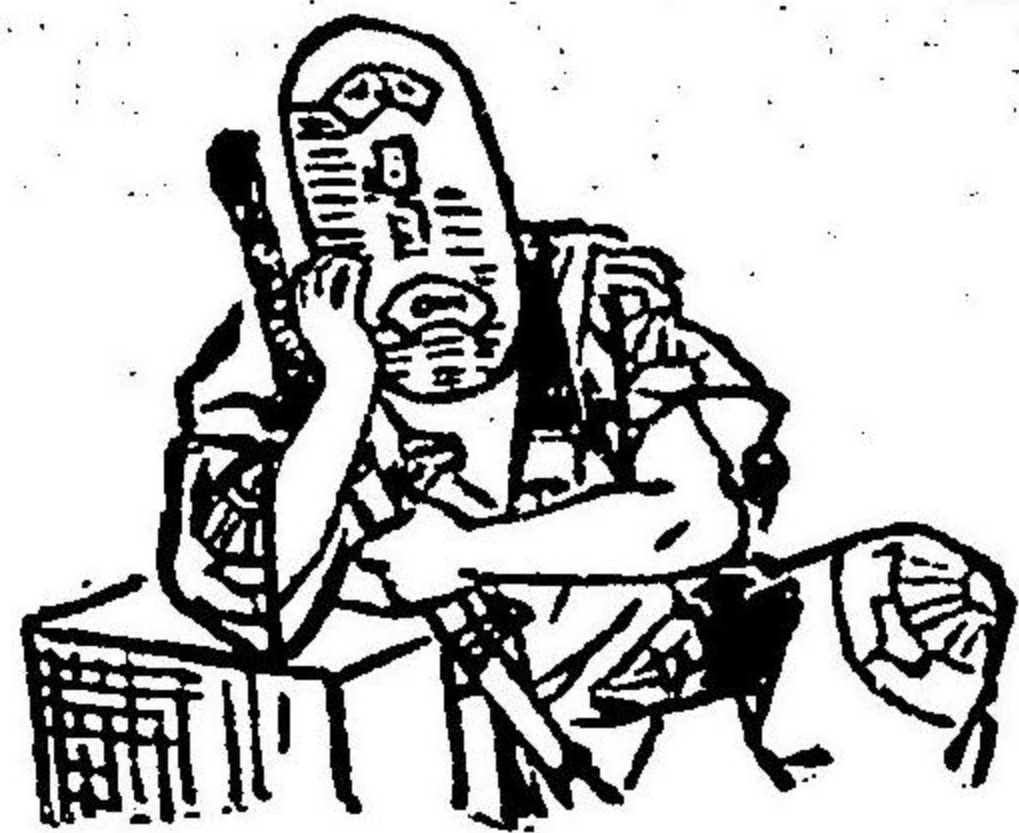
的  
と  
出奔

- (三二八) 赤兒の衣服
- (三二九) 心配
- (三三〇) 西洋骨牌
- (三三一) 鎮西爲朝
- (三三二) 曾我兄弟
- (三三三) 三種の神器
- (三三四) 石童丸の父
- (三三五) 江戸の真中
- (三三六) 蚊屋のそと
- (三三七) 道樂子息の新世帯

事よりも將來の事を思ふて打たねばならぬ事である例へば或る場所に打つたとすれば一ツ餘地を設けて次の行に打つ事であるかくの如くにして敵の知らざる内に四三を作る事である縦横斜等に二つ

本文  
碁盤忠信

小判  
忠信



- (三二八) 御亭主の忘れ物
- (三二九) 御さんのいびき
- (三三〇) 親父のいれ物
- (三三一) 天祐
- (三三二) 水無月
- (三三三) 武士の大小
- (三三四) 六分は他人
- (三三五) 冬の庭掃除
- (三三六) 奥五郎のいろ女
- (三三七) 大きな魚

續けて打つは敵の注目を避け易いから大に注意を要するのである  
●●●●●  
碁石十八個を四段に並べ第一段と第四段は五個其の他は四個づゝである、尤も第一段は右へ第四段は左へ

本文

世辭で

丸めて

淨氣で

捏ねて

とでまとめて

からしで

捏ねて

(三三) 冬の藪

(三九) 案山子の空砲

(四〇) 冬の山

(四二) 褒美の中味

(四三) 米國中部の都會

(四四) 海中の佛聖

(四五) 學校の小使

(四六) 淺草

(四七) 御馳走の度に御用をいひつかり

(四八) 大隈伯

(四八) 辻うら

(四九) 額縁

(五〇) 畑の大將

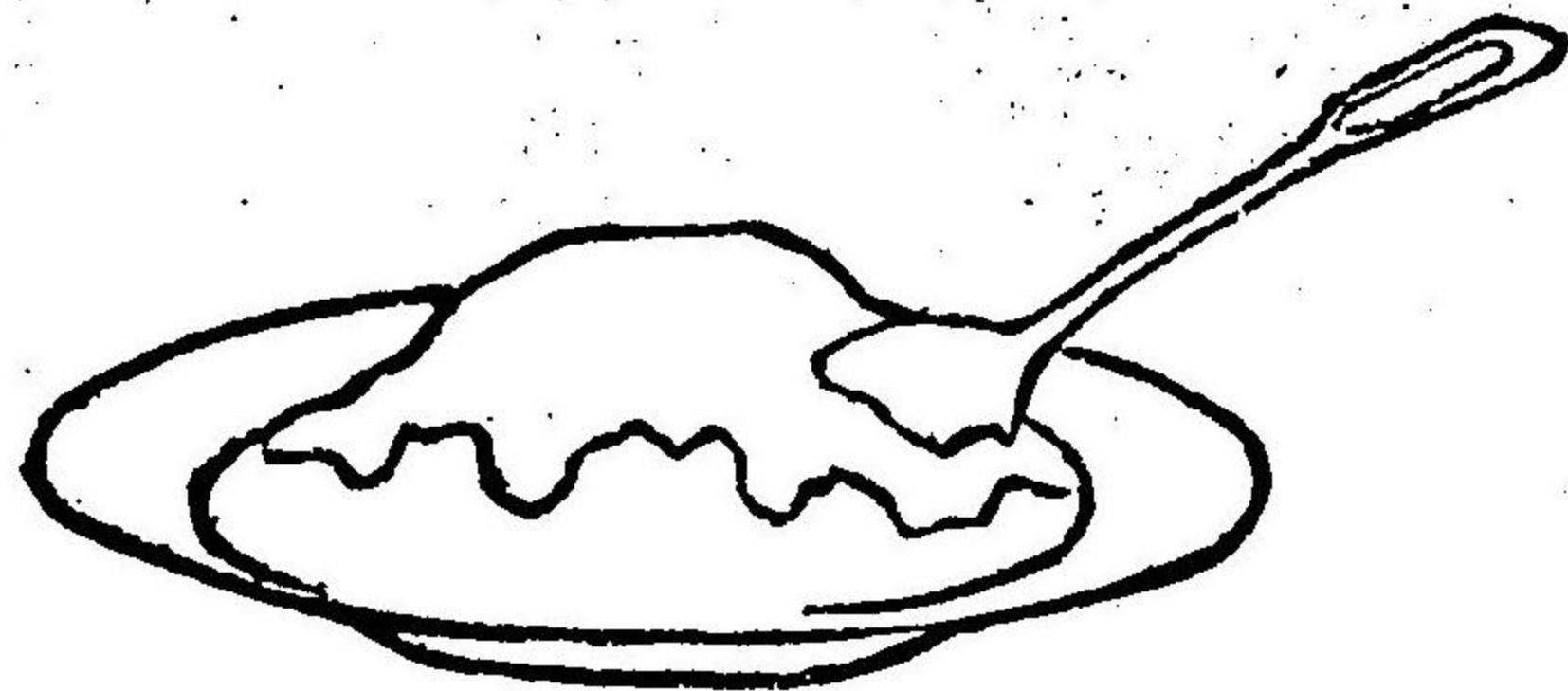
(五一) 本所の名物

(五二) 軍人の正章

何歳

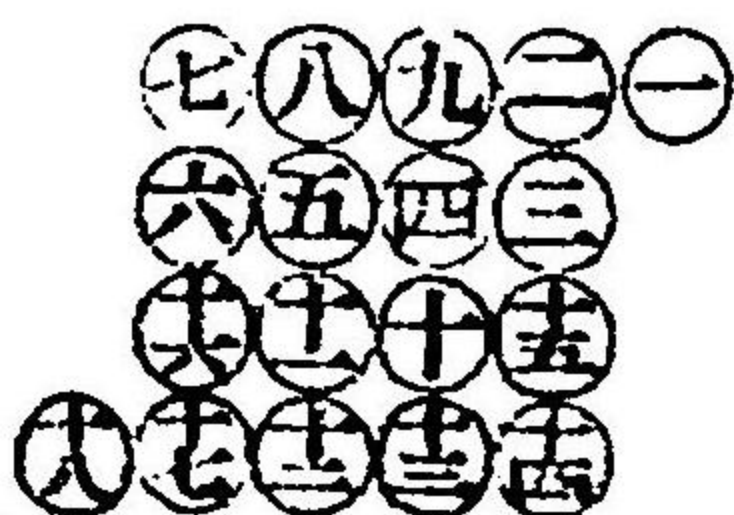
「全體君は何歳なんだい？」

「僕の齢かい、家では十三……學校では十四……」



諸君の御考案によつて幾通り迄出来るかを研究せられんことを望むのである

(第一例)



本文

「庭に咲いたり

咲かせたり

鰻さいたり

さかせたり

賣藥

(三五)

武家の刀

(三六)

商店の番頭

(三五)

親の身代壹萬圓

(三六)

勘定合ふて錢足らず

(三七)

東照宮の五重の塔

(三八)

力士の褌

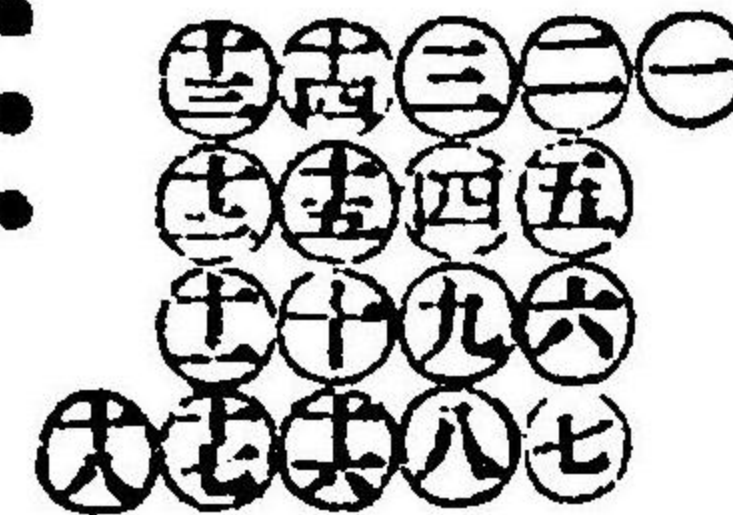
(三九)

二百十日の無事

(四〇)

夏の風

(第二例)



● 卅字拾ひ  
 ● 碁石を卅形に並べ  
 ● 前の例にならつて  
 ● 後戻りをせず順  
 ● 序よく拾ひ取るの  
 ● である



(三六)

腕白もの

(三七)

學校の旋風器

(三八)

鯉の駄

(三九)

釋師の紋切形

(四〇)

偽りのなき心

(四一)

投網の繕ひ

(四二)

大なる頼母子講

(四三)

アノ人は繼母かしら

(四四)

お味方議員

(四五)

俗界の花

(五四)

(五三)

(五二)

(五一)

(四〇)

(三九)

(三八)

(三七)

(二六)

(二五)

(二四)

(二三)

(二二)

(二一)

(二〇)

(一九)

(一八)

(一七)

(一六)

(一五)

(一四)

(一三)



本豊年ちや萬作ちや

素麵じや

晩酌じや



(二八九) 目くらの手引

(二九〇) 山師の世渡り

(二九一) 石を切る山

(二九二) 赤門學校

(二九三) 斃牛

(二九四) 露採

(二九五) 米十俵

(二九六) 珊瑚の櫛

(二九七) 鎌倉の土窟

(二九八) 井戸車

(二九九) 山師の支關

まじなひも

おんごろくと

申しけり

車座で引

馬引の轂

山風

本陰辨慶



洋犬の辨慶

へ移せばニツ飛びは出来るのである

カード遊び

競賣遊び

此遊びは何人でも構はぬ、殊に手製で出来るもので仲間面白遊びである札数は四十八枚でそれを假りに動物



本文

牡丹芍薬

百合の花

ポチヤン

ジャブく

湯屋の花

文房具

- (三〇〇) 新俳優
- (三〇一) 警察署長
- (三〇二) 高僧の巡教
- (三〇三) 出品物の秀逸
- (三〇四) 在郷の住人
- (三〇五) 預つた資本金
- (三〇六) ポートレースは
- (三〇七) 懸想文

植物、鑛物の三ツとして説明をしやうなら右の三ツを更に各二ツに分類せねばならぬ、例へば「動物」なれば四本足のもの、喰べられるものと云ふ様になし四本足のものは猫、兎、狐、獅子、喰べら



- (三〇八) 小松重盛
- (三〇九) 海陸の大王
- (三一〇) 文士の論争
- (三一一) 美人のお揃ひ
- (三一二) 青年立身策
- (三一三) 車夫
- (三一四) 内気な娘
- (三一五) 無禮者奴
- (三一六) 夕立
- (三一七) 鳴の羽搔

れるものを鶏、鯛、蛤、卵と云ふ様に植物も家の道具とか、喰べて甘いもの、とか、鑛物は役に立つ道具とか、美しい飾りもの、とかの二ツの分類をなしそして一分類に必らず違つた四ツの品物をこ

本文

大阪を立退いて

(三八)

樺太の恨

(三九)

兵士の面目

(四〇)

危篤

大袈裟に

(四一)

獨り娘の配偶者

太刀抜いて

(四二)

陰雨蕭々

本文

阿伴の仁王

(四三)

熊手

夜分の

(四四)

袖の下

二合

(四五)

使ひ込の帳尻

(四六)

池の鯉

(四七)

熊谷直實

しらへる。されば  
全體の畫の數は二  
十四枚であるが、  
更にそれを真中よ  
り二ツに裁り四  
十八枚とする。  
彌々出来上り揃ひ  
しならばよくこ  
れを混合て公平に  
一座の人に配る、  
配られた人は自分



花 卉

(三八)

君の及第點は

(三九)

比丘尼に簪

(四〇)

カアツプー

(四一)

都に歸る

(四二)

坂の六十度

(四三)

財産の處分

(四四)

便器

(四五)

ヤクザモノ、不平

の札を調べておく  
すると打出し役は  
一枚の札を取出し  
誰れにも見えぬ様  
になし場の中央へ  
出しながら、若し  
も猫の片割であつ  
た時は「四本足の  
動物」と云ふて買  
手を求めるのであ  
る、そうすると四

本文

すいた水仙

すかれた柳

殖えた

水田

鋤かれた山路

(三三〇) 海上の戦

(三三七) 女角力

(三三八) アテガヒの仕送り

(三三九) シヤツの縁止め

(三四〇) 賭場の手入れ

(三四一) 大なる砥石

(三四二) トタン／＼ののみぞれ

(三四三) 光秀の最期

(三四四) 小田原土産

(三四五) 七夕の逢瀬

本足の動物の片割

を持つものは自分

の持札にてなきか

と思ひ値段を附け

る、また他の人も

同じ考へにて以前

より高價に買ふ人

が出るかくして段

段値段を競上げ最

高のものへ其札を

落すのである、買

(三四六) 床の間の懸物

(三四七) 鎗の蛭巻

(三四八) 祝の一包

(三四九) 軽薄な茶屋女

勸述ひ

亭主「世の中は何所まで不思議に出来てゐたらう、

馬鹿者が蛇と美人を繋るに極つてゐる」

妻君「アラー！ また貴郎は其處お世辭を被仰つてか

らに……。」

ふた人は自分の持

つ片割と思ひしに

意外のものが来て

頭を掻く事がある

が若しも自分のも

つ片割であつたな

らば之を揃へて我

前へ並べ打出し役

を勤めるかくの如

くして身代限もせ

ず一番多くを揃へ



地口百番

【題】花卉

カード遊び

本文

六根

清淨



奴

猩々

玩弄品

- (三五〇) 時計屋
- (三五二) 無性のお三
- (三五三) 犬のざれ合ひ
- (三五三) 雄辯家の批評
- (三五四) 砂塵の上臍
- (三五五) 有平のおかめの面
- (三五六) 其品一寸
- (三五七) 我家の財政

たものが勝となるのであるが、随分山氣が破れて破産の運命を見る人もあるが、僥倖にも冒險が當つてホクホクするものも出て来る面白い遊びである。

取引に用ゆるものは普通基石である

本文

似た物夫婦

責た

物

フー



- (三五八) 立身の秘訣
- (三五九) 五街の花
- (三六〇) 鷹の上翔
- (三六一) 天下泰平
- (三六二) 貧民救恤
- (三六三) 年の寄らぬ藥
- (三六四) 俳諧歳時記
- (三六五) 不老不死
- (三六六) 空財布
- (三六七) 人形芝居

最初白は幾何黒は幾何と定め置き、一同のもの同じ類丈公平に頒ち置き賣買に用ゆるのである。

●●●●●  
豌豆蠶豆

これも手製で造らるゝもので札の数は四十枚が普通である、さてその札

本文

人の振

見て

我振

直せ

ひどい降り

にて

雨漏り

直せ

(三六八) 洋燈十個

(三六九) 一六銀行

(三七〇) 雪投げ

(三七二) 秋の月

(三七三) 海岸の散歩

(三七三) 船客

(三七四) 春の雲

(三七五) 天プラ井

(三七六) 師の恩

(三七七) 節操なき政客

は問答の二種に分

れてあつて問も答

も一題一枚づつで

ある、問は先生が

持ち答は生徒が持

つので札へ認める

事柄は歴史でも地

理でも色々のも

のでよい、勝敗

を定めるには不

公平なく豌豆と蠶

豆を人数に配り、

先生が問の札を讀

上げし時其答の札

を持つ人は豌豆と

いひ、持つて居ら

ない人は蠶豆とい

ふのである、若し

持つて居る人の答

が早ければ、其答

の札を讀上げつゝ

先生に渡すので持



(三七八) 鴛鴦

(三七九) 学校の幻燈會

(三八〇) 待合の女將

(三八二) 煙火

(三八三) 殺人犯

(三八三) 好男子

(三八四) うどの大木

(三八五) 僧俊寛

(三八六) 百丈の反物

(三八七) 一間二尺

本文

泣いて

明石の

風待に

泣いて

燦衆か

門口に

(三八) 絲遊

(三九) 蜂の櫻

(四〇) 六面廿一目

(四一) 四疊半

(四二) イツモ試験の成績は

(四三) 貧乏人の借財

欲占大相起意強。却極頓馬竹舞。此人得之查其香。代々麻野高根湯。

たぬ人が蠶豆と云

ふより後れし時は

札を持つて居る人

は蠶豆一つ宛を一

同の人に與へなけ

ればならぬのであ

るそして先生は又

たアトの時今一度

繰返して讀ねばな

らず生徒は又其の

札を再び讀上げら



漆器

(三九四) 後の藪入

(三九五) 鄭成功の最期

(三九六) 焼香

(三九七) 勉強のお料理屋

(三九八) 下げ振り時計

(三九九) 今戸の先の生れ

(四〇〇) 御殿へ藝人

(四〇一) 犬の啼聲

れる迄自分が持た

ねばならぬのであ

る、

又誰れでも考違ひ

をして腕豆と云ふ

べき所を蠶豆と言

ふたりする事があ

る其時は罰として

豆を一粒宛一座の

ものに配らねばな

らぬ、若又先生が

本文

鎌倉山の

星兜

からげり

屋根の

干蕪

- (四〇三) 日本三景の一
- (四〇四) 無月の夜道

公園で  
 「貴君、失敬です。か鳥渡船を貸して呉れませんか。」  
 紳士「お安い御用で、何卒澤山お使ひ下さい。」  
 巡査「では貴君の氏名を伺ひたいのです。先刻貴君が此所の公園の草花を摘つて居たのを見ましたから。」

同じ題既に済んだ問題を讀上げた時は氣付たる生徒が碗豆蠶豆と叫びるのである、其時先生は第一番に碗豆蠶豆と云た人に先生の位置を與へ先生は生徒となるのであるかくして先生の札の無くなつた時



- (四〇四) 精糖の妻
- (四〇五) 閻魔の毛抜
- (四〇六) 異分子の集會
- (四〇七) ヤマフコエテ
- (四〇八) お半の年齢
- (四〇九) 紅い布
- (四一〇) 低利の貸金
- (四一一) 店仕舞の拾賣

金物

一勝負が定るので勝負途中で豆が無なつたりする事があれば隣から借る事が出来る、借ても一番先に答の札を無くしたものを(模範學生)と云ひ一番先に豆を無くしたものを破産者と云、遊戯の終

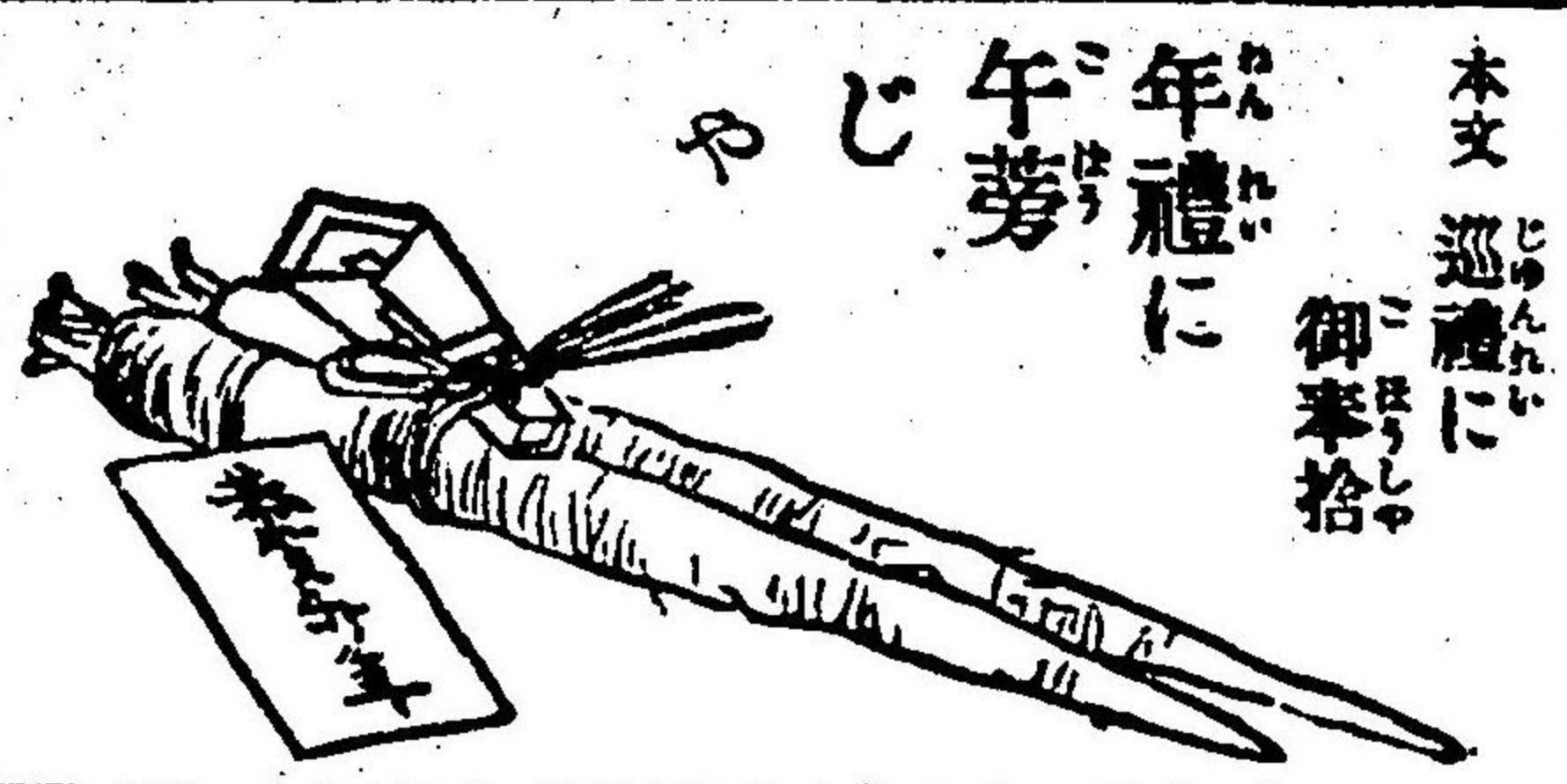


本文  
帆掛け  
た船が見え  
るぞへ

帆かけた  
尻が  
逃るぞえ

- (四三) 萬事意の如し
- (四三) 春の雨
- (四四) 又かつがれた
- (四五) 焦心苦慮
- (四六) 業平の舍弟
- (四七) 若衆の賣物
- (四八) 獄門の彦兵衛
- (四九) 西大久保の豪傑
- (四〇) 慷慨悲憤

りに一番多く豆を  
持て居ものを金満  
家といふのである  
誰か知る  
此遊びは三人から  
八人まで、外に一  
人の世話方がいる  
札は自分で作らる  
るもので其作り方  
は特別札が一枚、  
より4迄が各一枚



本文  
巡禮に  
御奉拾

年禮に  
午夢  
やじ

- (四二) 源氏の敵
- (四三) 國家の干城
- (四三) 職人の女郎買
- (四四) 下總の港
- (四五) 二疊敷
- (四六) 江戸ッ子
- (四七) 秋風
- (四八) あはてものゝ失策

陶器

又6より迄と11よ  
り15迄が一枚宛り  
と10は三枚づつ都  
合二十枚を一組と  
する、さて札は人  
數に應じて六人な  
らば百二十枚をこ  
しらへ札の半數丈  
裏面即六十枚へ甲  
とか乙とか書くこ  
れは相分にする必



水文  
身代を  
棒に振る

人體を  
棒に  
ふる

- (四九) 浅草の料理や
- (四〇) 家従
- (四一) 桃の川流れ
- (四二) 結構な品物
- (四三) 相撲の長勝負
- (四四) 海陸の水源
- (四五) 入谷
- (四六) 茶断ち
- (四七) 痰を吐く
- (四八) 素見

要からである  
さて世話役は、  
全體の札をよく混  
合して裏面の符合  
によつて其組合の  
人へ等分に頒ける  
のである、配られ  
た人は他の人に見  
えぬ様に數の順に  
並べて手に持つ、



- (四九) 不忍の暴風
- (四〇) 三股の高尾
- (四一) よく云ひ聞かす
- (四二) 妙齡

近い他人

「ハイ私は只遠い〜親類を持って居るばかりで  
……。」  
「ヘエイ、では大方死に絶たといふのですか。」  
「イヤ皆な金満家になつて了つたんです！」

すると世話方は  
「出して」と云ふ命  
令を發する、その  
時銘々は自分の思  
ふ札を俯向けて前  
に出す、すると又  
「仰向けて」と命令  
する、そこで最  
高點の人が其場に  
出た札を皆な自分  
のものとする

本文

二世も三世も

女夫じやと

二銭三銭

放捨

じやと

諸器具

(四三) 怠けもの

(四四) 誕生日

(四五) 西洋の舞

(四六) 月経

(四七) 貸座敷

(四八) 盗賊の横行

(四九) 竹楊子

(五〇) 道楽息子

けれども若しも同じ位の札があつた時は其次迄場に据え置て次の勝負の最高點者に贈るものである  
斯様にして幾度も繰返し繰返すのである  
幾度か續けて總計五百點を得たものが勝となるの



(五一) 冬の雲

(五二) 警察の追手

(五三) 阿波十郎左衛門の娘

(五四) 千歳の飾

(五五) 陳腐

(五六) 露帝

(五七) 御利益

(五八) 野糞

(五九) 樋の口

(六〇) 仁賢帝の幼名

である札の取り方は特別札(二十五點)と、15の札(十五點)と、10の札(十點)と、5の札(五點)の四種にて其他は役に立たないものである  
而して特別札は10半の力を持つので10以下の數なれば何時も

本文

ほんに浮世で

あるわいな

本に浮世繪

ある

わいな

【器】 諸器具

(四六) 大手柄

(四七) 琵琶湖の住人

(四八) 清國の蚊いよし

(四九) 野猿の狼藉

(五〇) 大名の雪隠

(五一) 胸の勳章

(五二) 水浴の犬

(五三) 正直ものゝ信用

(五四) 外國の小百姓

打勝つ中が出来る

が11以上の札には

取られるのである

こゝが即ち特別な

所、猶終りに此遊

戯をなすには左の

注意を要する

(一)

特別札は外の者が

皆低い札を出した

と思ふ時に出すが

可い(二)高點の

札は最初に打出す

も損だが又一番あ

と廻しにするのも

必ずしも得とは云

はれの(三)要する

に札の出し方が時

を得ないと失敗す

るから常に今迄何

の札が出たかを

忘れず、又今對



取合物

(五〇) 新聞

(五一) 平清盛

(五二) 隅田川

(五三) 大學前大通り

(五四) 皇室の藩屏

(五五) 冬の風

(五六) 絶體絶命

(五七) 兒島高德

【器】 取合物

本文

見れど

盲目の

かき覗き

見れば

てよらの

垣根越し

(四七八) 向ふ鳥

(四七九) 七種

(四八〇) うつけ者

(四八一) 役所向の押切

(四八二) 角力の同體

(四八三) 子供の晴れ着

老幼男女集一堂。数番扇引舞宅忘。時事珍題何極妙。廣沸茶處興味長。

手が出す札の高低を考へねばならん閉塞遊び  
これは名刺大の厚さ紙で自分でこしらへる事の出来るものである。  
先づ造り方から説明せんに、名刺大の紙五十六枚をアイウエオの五種とし

雑品

(四八四) 五街職員録

(四八五) 逐鹿場の失望者

(四八六) 聲はすれども姿は見えず

(四八七) 秋の向鳥

(四八八) 兒鳥高德

(四八九) はたしあひ

(四九〇) いとしい貴方の顔と顔

(四九一) 木遣の頭領

てアを除く外は各十一枚を真中へ並行線一本を引其上にアとかイとかを記入し其下へ1より11迄の羅馬數字を書くのである。アの部丈には特別の規定があつてそれには4と9の二枚が無いので都合



本文

泰山は土壌を  
ゆづらす

鯛さん

は鯛を

いち

ず



(四九二) 修徳の秘訣

(四九三) 猛獣の手

(四九四) 肺の病

(四九五) 源義朝

(四九六) 象の急所

(四九七) 宮刑

(四九八) 按摩

(四九九) 果し合ひの後

(五〇〇) 聖人の教

(五〇一) 幼児の會話

九枚になつて居る  
其代りに閉塞札三  
枚こしらへるので  
ある、尙念の爲め  
にその作り方を左  
に圖を以て説明す  
る

ア一 この例に

よりて各種とも一

より11迄こしらへ

るのである



解之部

衣裳

- (一) 色つく野邊 花いろ木綿
- (二) 千艸の野邊 チクサ木綿
- (三) 天竺 天竺木綿

高ア一II これはア  
 ともに造る高札 イウエオ  
 .....閉 ..... これは閉  
 塞三枚の雛形  
 例外の札は  
 ア特別5 ア特別10  
 以上上の雛形によ  
 つて札は造られた  
 ものである、これ  
 から其取り方を説  
 明する

本文

凡夫盛んに

神崇らす

ポンプ

盛に

火事

猛らす

(四) 七子(赤染右衛門和泉式部紫式部)

部清少納言伊勢大輔馬内侍小

式部

(五) 皿サ(更紗)

(六) 慕間掃く

袴はく

(七) 付ケ紐がある

越中禪

(八) きんを包む

積鼻禪

(九) 憤怒し

積鼻禪

(一〇) 息子を締つける

ふんどし

(一一) 大事のものをしまふ

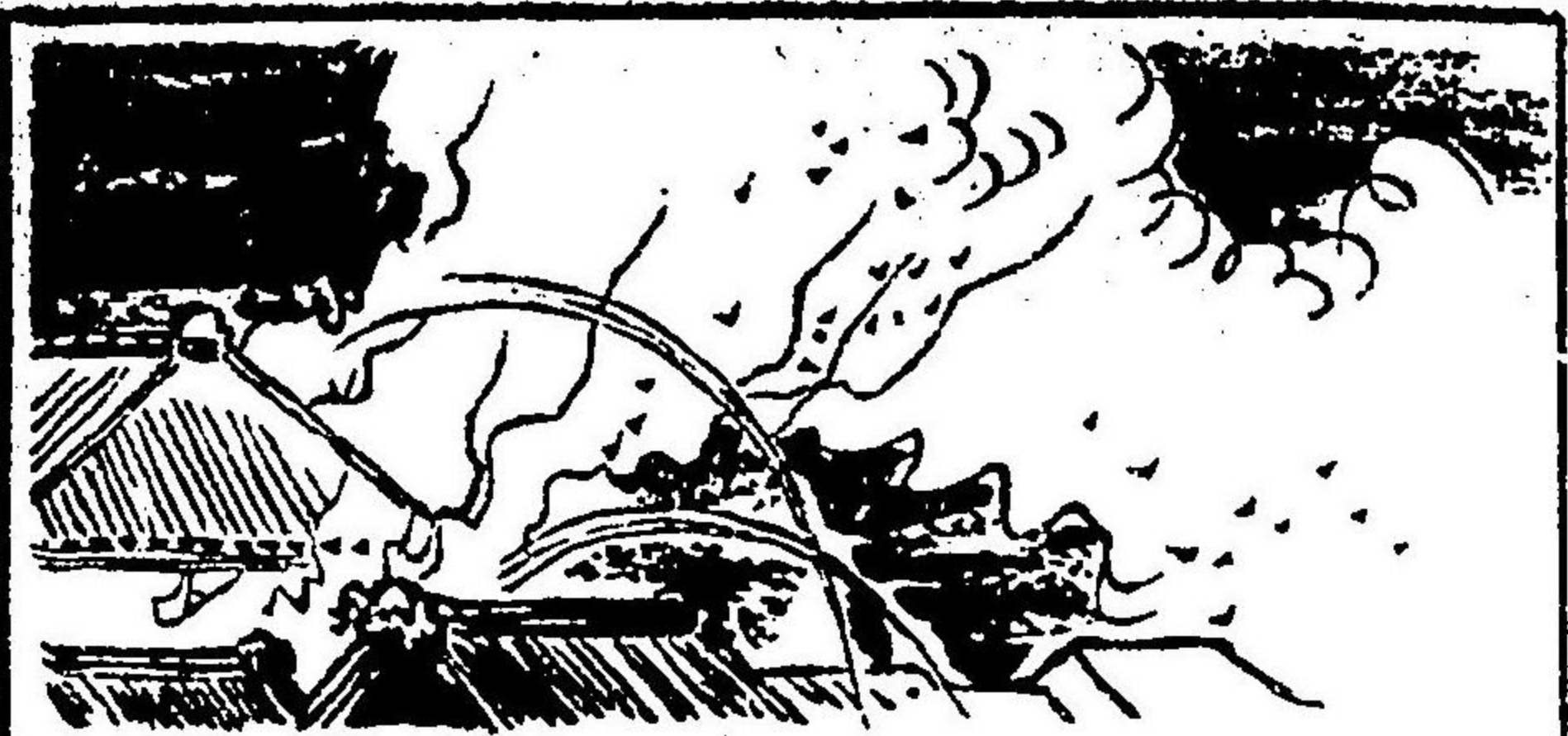
湯巻

(一二) 八幡

綿八枚

(一三) 前へ垂れる

まへだれ



先づ札が揃ひしならば(1)先づ十分に一切の札を能く切り、悉く一同に分配する、一枚は多い人と少ない人とが出来れば、出来れば止を得ない配られた人が持つのである、(2)銘々は配られた札をアとか

イとかの種類に區別して数の順に並べて手に持て居る(3)分配方の右手の人が打出役を勤めるので我が手にある札を何れでも一枚出し「アの1」とか「アの2」とか札の名を言ひながら仰向けで自分

本文

向ひ小山の  
しちく竹

うたへ

こだまに

響く丈け

(二四) どこかに穴がある

女の下帯

(二五) 遠いと(唐糸)申します

(二六) 宰府(財布)

(二七) 決闘(毛布)

(二八) 鳶(トンビ)

(二九) 街頭(外套)

(三〇) トンビ(外套)

(三一) 情婦(上布)

(三二) カタビラ(帷子)

の前に置くと、其

札と同じ種類で直

上の敷の札を持って

居るものは誰れで

も其札を仰向けて

自分の前に置く次

に又其敷の上の札

を持つ人が札を出

す斯様にして順々

に一々上の敷の札

を出し終に其種類

の高札即ち前の例

でいふと「アの11」

に至つて止むので

其高札を出した者

が其次には新たに

我が手の何の札で

も打ち出し始める

のである夫から又

順々に一ツ上の敷

を出して行きかく

幾度もする内に、



(二三) 開基(甲斐絹)

(二四) シヤア(紗)

(二五) あさに限る

(二六) 夏じばん

(二七) 禁闕を守る

サルマタ

(二八) ゆさが少い

半袖のシャツ

(二九) モウセン

(三〇) モウセン



本文  
富士見西行



首に

財囊

【解】衣裳

(三〇) カスリ(飛白)

(三一) 一ちいみ

ちいみ一反

(三二) うらない

表地一反

題福引 (其四)

愈爲三開會座俄譯。更至三抽籤愁愈加。

難題類考果何物。不見品内眞是花。

カード遊び

其手の札の悉く出  
拂つた者が出来た  
を合圖に遊びは一  
先づ終りを告げる  
のである、銘々が  
出す札は自分の前  
に一重ねにして置  
く事は忘れてはな  
らぬ、閉塞札があ  
ると、何時でも自  
分が札を出すと同

本文  
一事が萬事

吉次が  
案じ



装飾品及化粧品

(三三) チョイトひつかける

羽織の紐

(三四) 金着巾着だ

(三五) 首にかける(カラ)

(三六) 備後

ピン五本

(三七) カラにかける

ネクタイ

【解】装飾品及化粧品

カード遊び

時に閉塞と叫び閉  
塞札をも續いて出  
すことが出来る、  
之れを出すとなら  
に札を出す権利が  
與へられるので  
あるから自分が新  
たに打ち出す方が  
利益な時にのみ之  
を行ふのである。  
例へば甲のものが

本文

水は

方圓の

器に依る

根津は

公園の

後ろに

倚る

(三六) 双方へ引分る

毛筋立

(三九) ビン

襟止 二個

(四〇) ステッキ

洋杖 二本

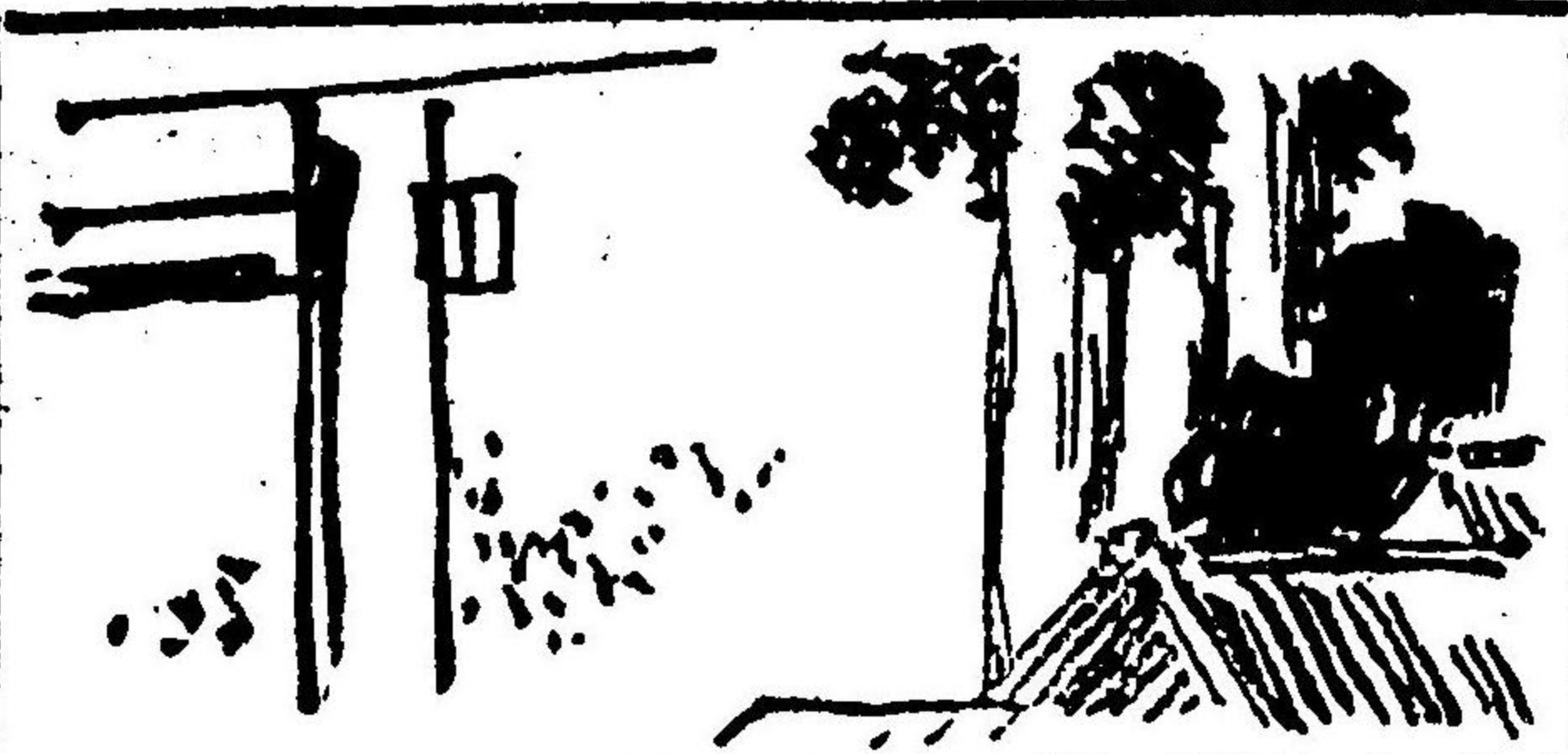
(四二) 鼻にかける

鼻眼鏡

(四三) カラー

(四三) 法度

ウの4とウの5を出したのに乙のものがウの6一枚丈で閉塞したいと思ふ時若し閉塞札がある、ウの6閉塞と叫びてウの6を出し其上に閉塞の札を載せるので次に乙のものが打出しとなるのである



(四四) 日も短い

(四五) さざみを入れる

結んだ羽織紐

(四六) チャキキ

煙草入

(四七) 西洋の旅(靴下)

時計

(四八) キンをさせる

金煙管

若し誰かの札が無くなつて遊戯が段落を告ぐる時尙手に閉塞の札を持つた者があると其の者は罰として五點を減じられるされば若しも二枚あれば十點の減罰である(5)アの5とアの10とは特別札で

本文

和歌の浦

には

名所が

ござる

馬鹿な

つらには

藝者が

かゝる

(四九) 牡丹

シャツのボタン

(五〇) 合はせてとめる

ブローチ

(五一) 寫本

シャボン

(五二) 赤と白

紅とおしろい

(五三) 貴女の水

おしろい下



(五四) 塗りて木質をかくす

おしろい

(五五) 紙(髪)をすく(くし)

(五六) 苦死(櫛)

(五七) 紙(髪)を結ふ

元結

(五八) 五分玉

かんざし

(五九) パチン

帯止め

次に1からでも出た時は4が自然高札となるので自然閉塞と名付けるのであるが眞の閉塞の札のやうに勝手な閉塞する力は無いのである(7)一番に札を出しきつた者が勝となるので其時外の者の手に

本文

禿かむろくと

澤山たくまへ

さうに

たまるく

と

澤山たくまへさうに

(六〇) 鳴な痔ぢ

頭あたまのかもじ

(六一) 半はん缺けつけ

半はんかけ

(六二) 手て柄がら

テガラ

(六三) けうけうだい

鏡きやう臺だい

(六四) 報ほう徳とくの盤

かゝみ

残のこつて居ゐる札はたを數かぞ

へ札はた一つを一點いんと

數かぞへる而しかして若もし

其その中なかに特とく別べつ札はた即すなはち

アの5とアの10と

があるとそれは五

點てん十じゅう點てんと數かぞへる又また

特とく別べつ札はたは勝かつた者もの

の打う出だしの札はたの中なか

にあつても亦また五ご點てん

十じゅう點てんと計けい算さんするの

(六五) 節せつ儉けん

せつけん

(六六) 兄けい弟だい

鏡きやう臺だい

(六七) 俱く樂らく部ぶ

クラブ洗あらい粉こな

(六八) 戴たいヤやモもンんド

戴たいヤやモもンんド齒はみがき磨ぎ

(六九) トウケイ

時と計けい

である此かの如ごとく

幾いく回かいも勝しょう負りょうをして

早はやく百ひゃく點てんになつた

者ものを勝かつとするので

ある

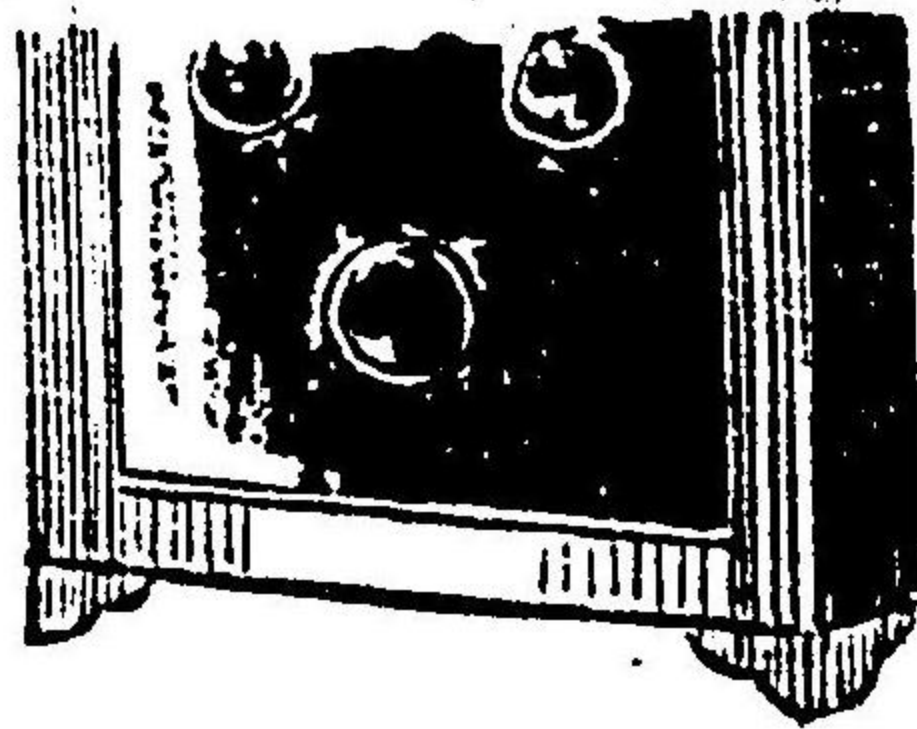
歌うた力ちからルる夕ゆふ遊あそび

●●●

さて歌うた力ちからルる夕ゆふの取と

方かたには色いろ々くあるが

『ちらし』といふ



本文

胡馬北風に

嘶く



獨樂を工夫で

いごかす

(七) 貧乏

ピン、帽

手遊びの旗は

當りし福引に

きやつきやと騒ぐ

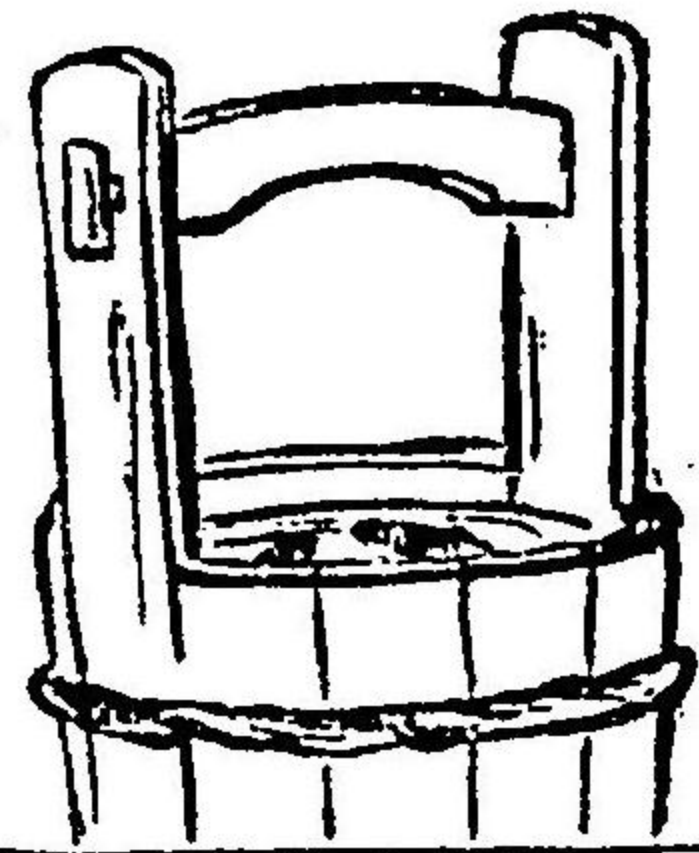
はした女もあり

山風

のは、下の句を悉く時散らし上の句を讀むに随ひ取るので、多く取つた者を勝とする  
●組分け  
●人数を四組或は五組に分け百枚を平等に配り自分で自分のを取た時は次へ一枚を送り(尤

本文

手活の花



手桶に

鮎

菓子

(七) 蔭共に千兵

せんべい

(七) おぼろで御座い外

おぼろ饅頭

(七) うそで固める

胡麻ネヂの菓子

(七) 戀の座頭

珈琲砂糖

【解】 菓子

歌ガル遊び

も送らないこともある)人の札を取れば一枚又三枚を送り若し人の札を間違へて取れば、「お手つき」と唱へ罰として其札を持ち歸るので、早く札のなくなつたのを勝とする  
●源平

本文

十八年

天津の風

十八圓

の  
餘し金

(七五) ぱん

(七六) これが爲めに働く

食ぱん

(七七) 角があつても甘い

金平糖

(七八) 身持ち

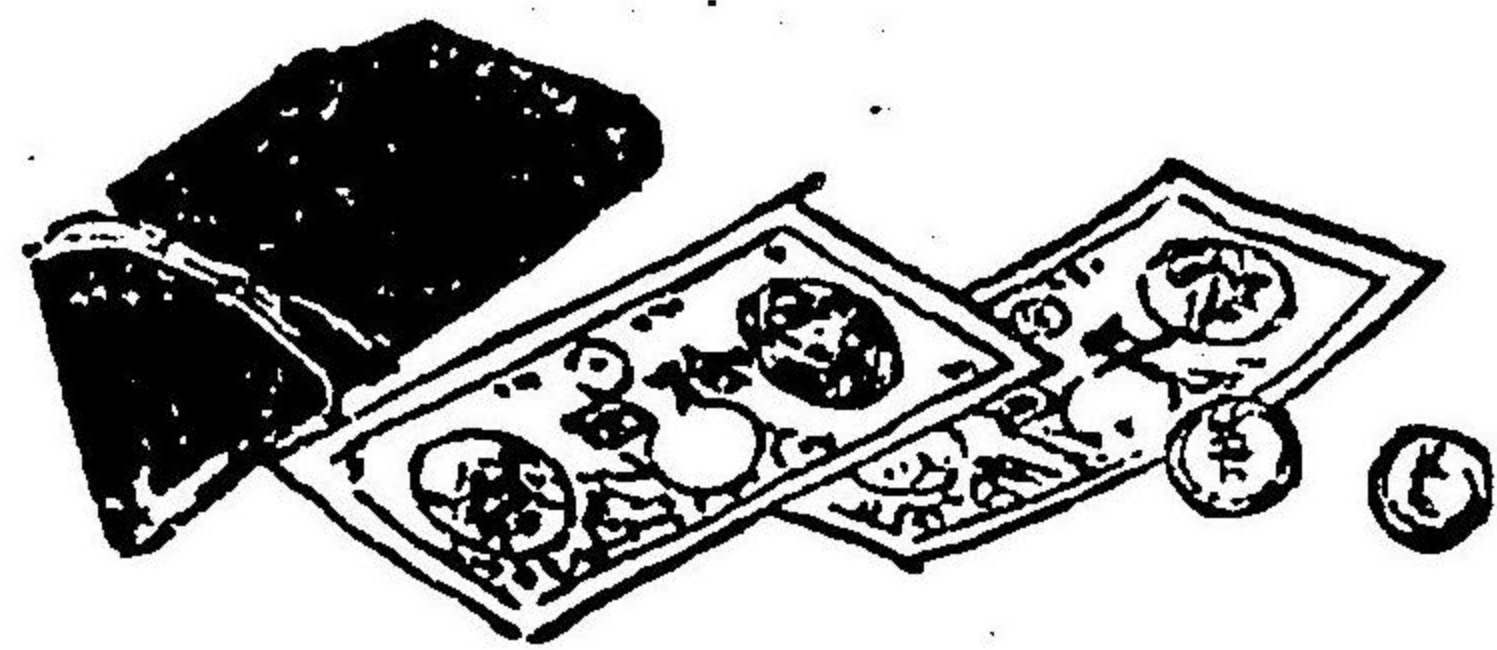
餅三切

(七九) 甘いねこ

金花糖のねこ

(八〇) ツクツク美味い

人数を二組に分け  
競争する遊戯で此  
遊び中最も活潑で  
又今日廣く盛に行  
はれて居る、偶に  
は下の句を讀んで  
下の句を取るとも  
あるが大抵は上の  
句を讀んで下の句  
を取るのである  
お伏せ



上等の菓子

(八一) 洋館

羊羹

(八二) 雨を遣る

袋入の飴

(八三) 時雨

しぐれくわし

(八四) 秋の最中

モナカ

(八五) 時雨まんぢゅう

これは普通百枚を  
平等に人数だけに  
配つて了ひ、銘々  
幾枚か能く覚えて  
俯伏にふせて置く  
ので若し其札が出  
た時開け損ねると  
罰として外の者が  
一枚又二枚宛の  
札を貰ひ旨く開け  
ると三枚とか五枚

本文

惚れて

通へば

千里も

一里

洒落て

遊べば

千住も

一度

【解】菓子

(八六) 牛皮菓子

(八七) 岩を越

岩おこし

(八八) やはらかで甘い

水飴

「昨夜の會位寂しいのは、近頃参ら  
しがつたれ。」  
「左うだ、初めの内は可厭に寂しかった  
が、君が歸つてからは、急に賑になつ  
て来たやうだつた。」

歌ガル々遊び

とかを次の者へ送  
る遊びであ  
る

役札

むべ山と乙女とを  
十枚月雪花戀人の  
札を各々五枚と定  
め、これが出て自  
分が取ると十枚五  
枚を次へ送るので  
あるが、うさとか  
こちは涙と云ふ所



【解】果物

果物

(八九) 未完

蜜柑

(九〇) 近くに出る

金柑

(九一) 粹(酸い)を好まれる

梅

(九二) 琵琶

枇杷

歌ガル々遊び

からこれが出ると  
罰として外の者か  
ら二枚又三枚宛を  
貰ふこととなる、  
これは大抵一人宛  
に分けて遊ぶ時に  
するので源平など  
の時には減多にし  
ない  
早取法  
カルタを上手に取

本文

雪駄

片しに  
下駄片し

反つた

案山子に

寐た

案山子

(九三) 赤垣源藏

赤柿

(九四) 股を出す

桃

(九五) 誰

何か 西瓜

(九六) 苦

栗

(九七) だいく

棧

らうと思ふには先

づ第一にその歌の

意味を研究して其

歌をよく暗誦せね

ばならぬ上の句を

終ひ迄讀まなけれ

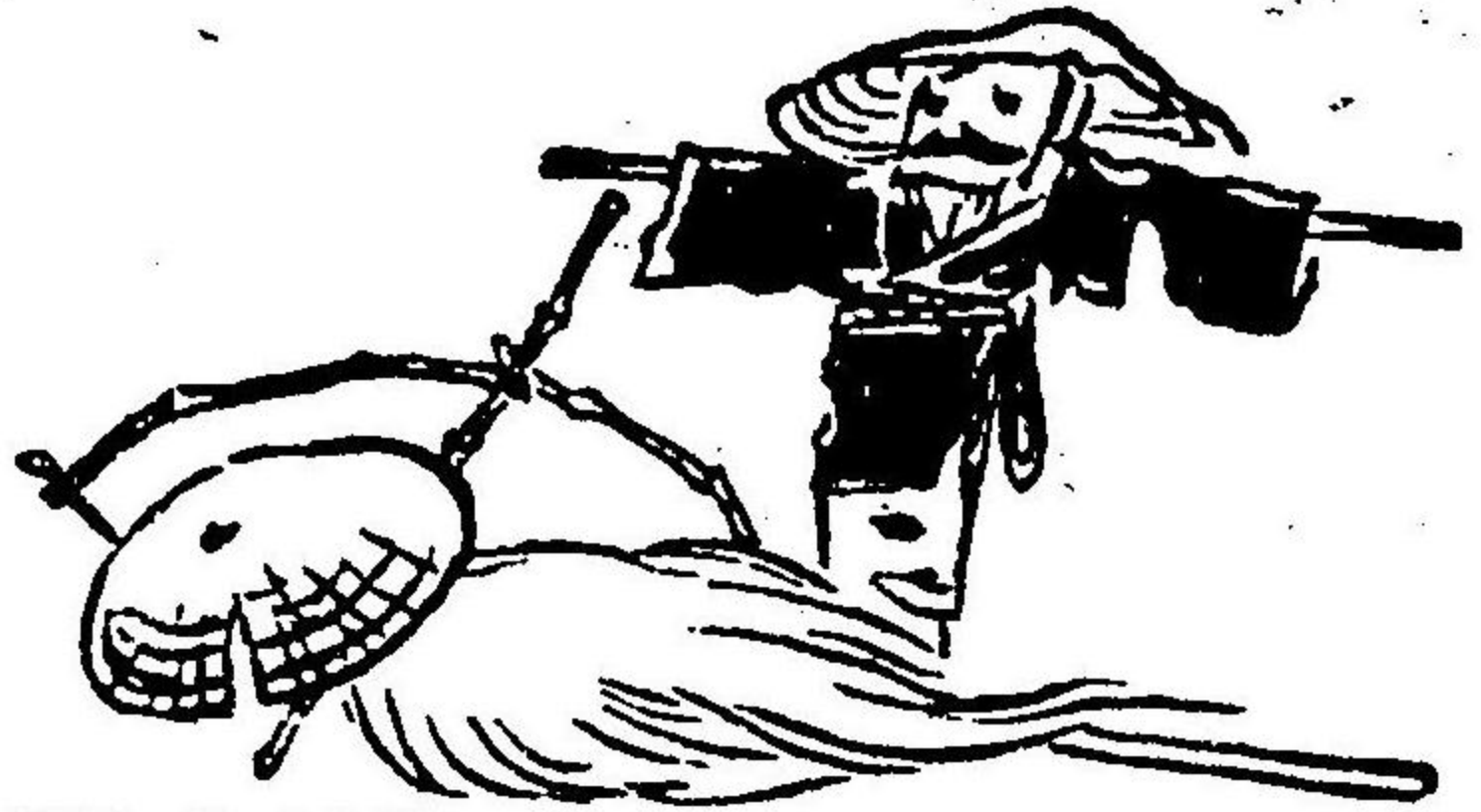
ば下の句が思ひ出

ぬ様ではとても駄

目である、はじめ

の上の句二三字聞

くと直ぐ下の句を



(九八) 一樹空

梨の實

(九九) 輪講

林檎

(一〇〇) カリンと申ます

(一〇一) 今日破談

ハタン杏

(一〇二) 無道

ブドウ

(一〇三) 素股(杏)

知ると云ふ位暗誦

が肝要である

暗誦をなすには色

色の方法を以て研

究する必要がある

其方法は幾種もあ

るが先づはじめの

讀み聲の同じ歌が

幾首あるかをアイ

ウエオ順に分類し

てよく暗誦する事



本文

回向せうとして

お姿を



猫をせうてふ

お姿か

(一〇四)

椎

(一〇五)

来る身案ず

胡桃杏

子「阿父さん！英國は自由の國だつて  
いひますが、本當ですか。」

父(熱心に)「そ、それに違ひない！」

子(膝に落ちぬ顔附で)「ぢやア阿父さ

ん、何故彼の曲馬を観るのにも、木戸

代を取るんでせう？」

である其次には下  
の句を前の如くな

し幾度もく繰返

すのである、かく

して上の句二三

字を讀めば直ぐ下

の句が出る様に練習

することである

歌の暗誦が滞りな

く出来、上二三

本文

趙氏連城の壁

粽子天上の玉



魚鳥

(一〇六) 東風(コチ)

(一〇七) 辛い(鯉)

(一〇八) さばく

鯖二疋

(一〇九) ほしいか

干鳥賊

(一一〇) 九斤

クキン鶏

で下の句を思ひ出

す事が自由自在と

ならば次にキメ字

とヤマ札とを覚え

ねばならぬ

キメ字と云ふは

はるスきて

はるノ夜の

あきノ田の

あきカせに

あまッ風

あまノ原

本文  
市に三虎

醫師に

じやんこ

(二二) 鴈(鴛鴦)

(二三) 酒(鮭)

(二四) いた(看板)にのる

蒲鉾

(二五) 伊勢海老

大佐より

(二六) 鯛針魚

(二七) 数の子の親

にしん

(二八) 子を珍重する

と云ふ様なもので  
二字目或は三字目  
から變る歌の事を  
云ふのである、尤  
も一字目できまる  
ものも澤山にある  
此キメ字の必要な  
事は練習中には左  
程でもないが上達  
するに従ひ缺くべ  
からざるものであ



むつ

(二八) 正誤(せいご)

(二九) おこつけい

烏骨鶏

(三〇) 二心

にしん

(三一) 鳥(真打)になるのもある

鶏卵

(三二) 子をかへさぬ

家鴨

る、今更説明する  
迄もないが此カ  
タ遊びは一秒一利  
那を争ふもの故一  
字でも先にその札  
が何であるかを知  
る必要を認めるの  
であるされば此キ  
メ字を研究すると  
せぬとは相得に非  
常の差違を來すも

本文

花は

上野か

染井の

つゝじ

さきは

いやのか

そがひの

ふて寐

(二三) 詐欺(驚)

(二四) 貼るを待つ

(二五) しぢうから

四十から

題福引 (其五)

令息占洋紙

幹事無如才

令嬢當花費

此處却苦心

のである次にヤマ札に付て説明せん  
にヤマ札とは「君がためをしからざりし」と「君がためはるの野に出て」と云ふ歌の如く初めの文字が同じで間違ひ易い札の事である此ヤマ札の事を記憶して置け



野菜

(二六) 及は錆び

葉山葵

(二七) 那須

茄子

(二八) 木賣(胡瓜)

(二九) 茗荷の至り

(三〇) ナボク

牛蒡二本

ば一つだけ先に出  
てしまうと、跡は  
もう一枚しか無い  
に定つて居るから  
其時はチヨット讀  
みかけさへすれば  
速く取る事が出来  
る故勝負の上に着  
るしい差違が生ず  
る其歌は左の十四  
枚である

本文

高天ヶ原

には

神とまる

墓場や

原では

蚊にこまる

(二三) お株

蕪菁

(三三) 散會

慈姑 三ヶ

(三三) 福宜

葱

(三四) 浪花

菜 二把

(三五) 大根

(三六) 調べて見れば穴だらけ

あさぼらけアリあけ

あさぼらけウチの川霧

君がためハるの野

君がためチしからざり

し命

こゝろアてにをらばや

こゝろニもあらで

ちざりキなかつたみに

ちざりオキしませもが

なにはカたみじかき声

なにはエの声の假寐に

よの中ヨみちこそなけ

れ

よの中ハ常にもがもな

わだの原ヨぎ出で見た

は

わだの原オそしまかけ

て



(三七) 浪花

菜 二把

(三八) 競り

芹

(三九) 随喜

すいき

(四〇) 奈良漬

(四一) うり付けがうまい

奈良漬

以上はカルタ取り

に熟達する準備な

のでいくら歌をよ

く暗誦しても實地

に取つて見なければ

勝敗は分らん、

それでいよく敵

味方に分れて交戦

する場合には其陣

立即ちカルタの並

べ方が非常に肝要

本文

釋が身を食ふ



西瓜

みを食べ



【解】野菜

(四) 落京

ラツキョウ

(三) 澤庵

香の物

(二) 膳舞ふ

せんまい

(一) わら火

蕨

(一) 筑紫

つくし

歌カレ遊び

である  
並べ方は自分には  
取り易く敵には取  
り難いやうに、ど  
の札が何處にある  
か敵にさとられな  
いやうに深く注意  
せねばならぬ又並  
べ方は、全く自分  
ひとりで考へなけ  
ればならない、こ

本文

脊中合せの  
松飾り



脊足が

裕に

豆絞り

【解】野菜

(二) 松竹(松茸)

(一) 九年ぼう

(一) ほしいな

干菜

(一) 大混雑

大根と薩摩芋

(一) 困厄

こんにやく

(一) 乃は錆

葉山葵

歌カレ遊び

れまで世に行はれ  
て居る並べ方は二  
三にして止まらず  
上の句によつて、  
アイウエオ順に並  
べるもの、イロハ  
順に並べるもの百  
人一首の歌の順に  
ならべるものなど  
あれどこれ等は随  
分古い仕方であら

本文  
曾我の

十郎  
祐成

蕎麥の

蒸籠

好きなり

(一五) 孫がつく

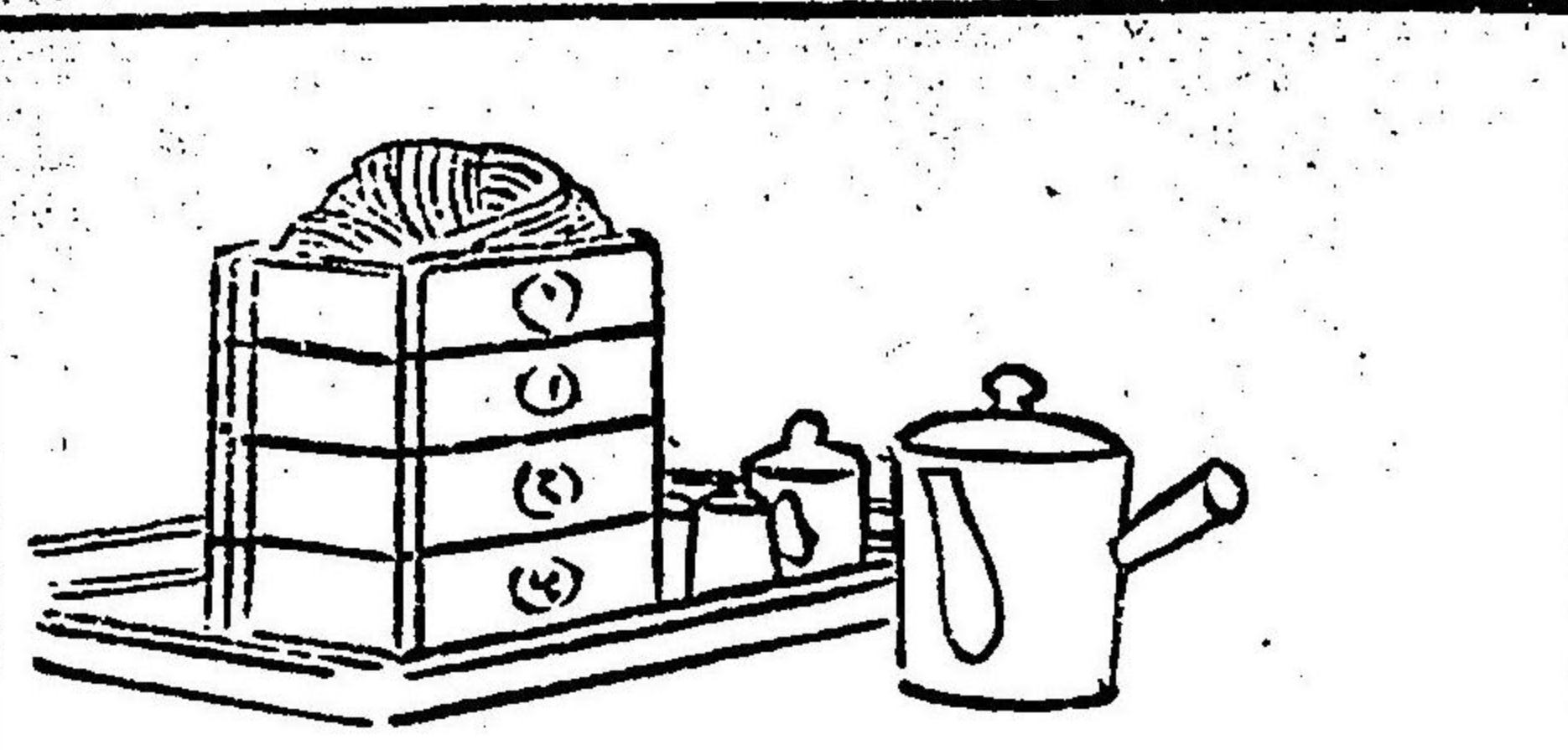
さと芋

女客「此のお召は大變に意氣な朝なん  
だが、私にやア色氣が若過ぎやアし  
ないかと思ふんだが……」

番頭「奥様がそんな事を被仰いまして  
……貴女はお歸の半分にもお見えに  
なりません様に……」

敵に見わけられ易  
いやうである

その外歌の種類に  
よつて並る者即ち  
山川水春夏  
冬雪月花とい  
ふやうに分け並る  
これはよく覺え込  
んでしまへばよほ  
ど有效なやうに見  
ゆる、なせかと云



乾物

(一五) 節が揃はぬ

經節大小二本

(二五) 武士道

經節十

(三五) 君を守る

玉子

(四五) 大君の代理

玉子

へば割合に數に見  
分けられないから  
である、またこれ  
と似た並べ方で、  
人愁逢我衣、景  
雲、身、思、涙、など  
各部に分けて並べ  
るものもある、が  
何れも一得一失が  
ある、此外一枚札  
を殊更に手元近く

【解】乾物

歌ガルヲ遊ビ

本文

じたい我等は

都の生れ

地代

上がれば

都を

のがれ

(一五八) みたま(玉子三)

(一五九) 不動(駄十)

(一六〇) 菖蒲(生駄)

(一六一) かたくり

かたくり粉

(一六二) 屑葛

(一六三) 九里(栗)

(一六四) 五分く

葱

(一六五) 正札(生駄)

並べる方法もある

がそこは諸君の研

究に任す事とする

それから並べ方で

ある一體何列に並

べるがよいかと云

ふに、これも大に

注意すべきことで

人によつては四段

又は五段に並べる

ものがある、この

並べ方は非常に損

である、さう幾段

にも並べると場所

を広く取る事と敵

の札と自分の身位

との距離が遠くな

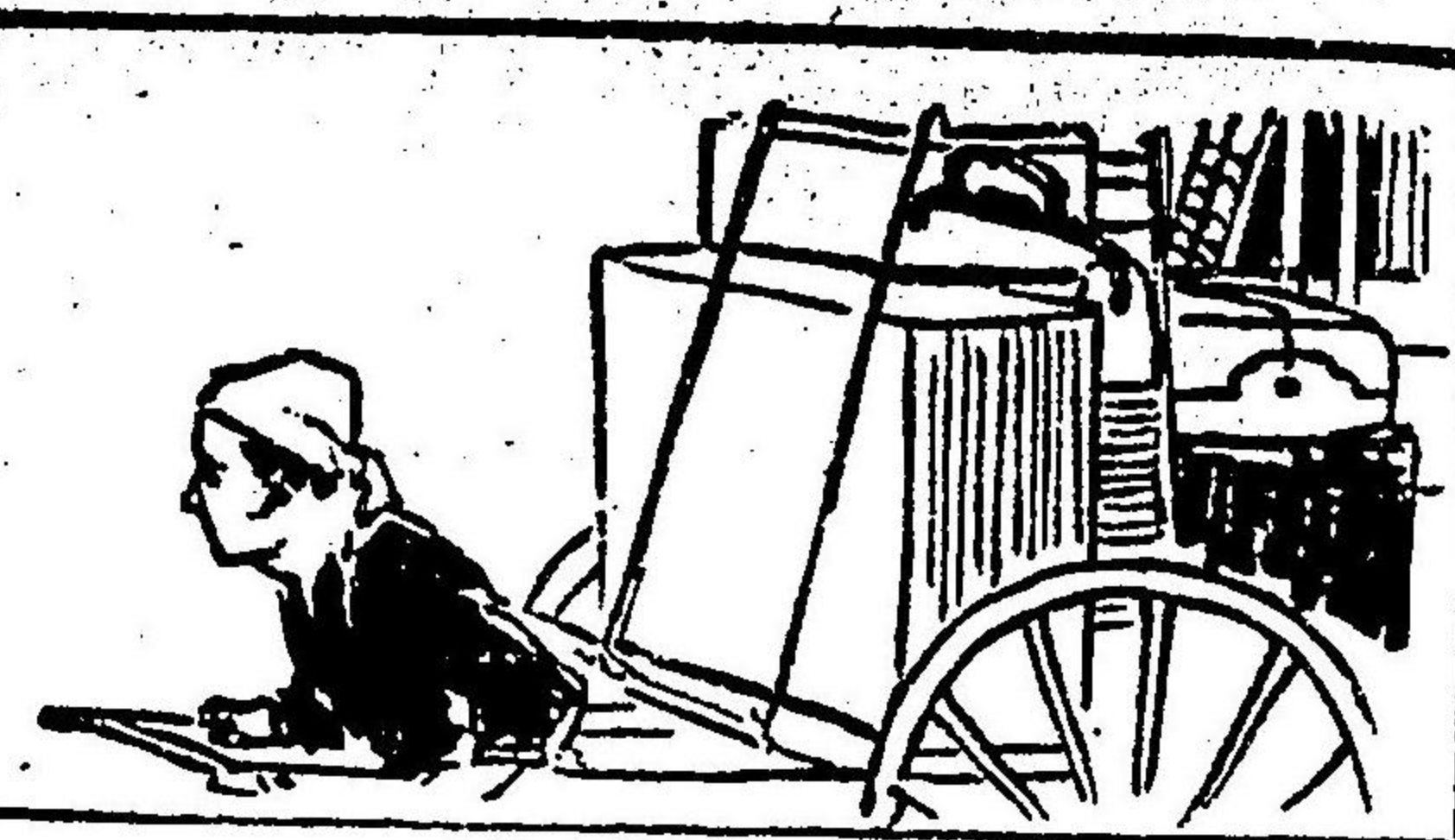
るゆゑ、交戦の際

に敵の札が目につ

いて居ながらそれ

を手早く取る事が

出来ぬからである



(一六六) 玉乗

玉子海苔

(一六七) 友白髪

しらが昆布

(一六八) 寒晒し白玉の粉

(一六九) 小刀

小豆

(一七〇) わらび

蕨

本文

左のかひなに  
櫻の彫物

簾の間に

更紗の  
羅

食料品

(二七二) 座禪豆

(二七三) もりとう

(二七四) もり十

(二七五) 伊藤引く(糸を引く)

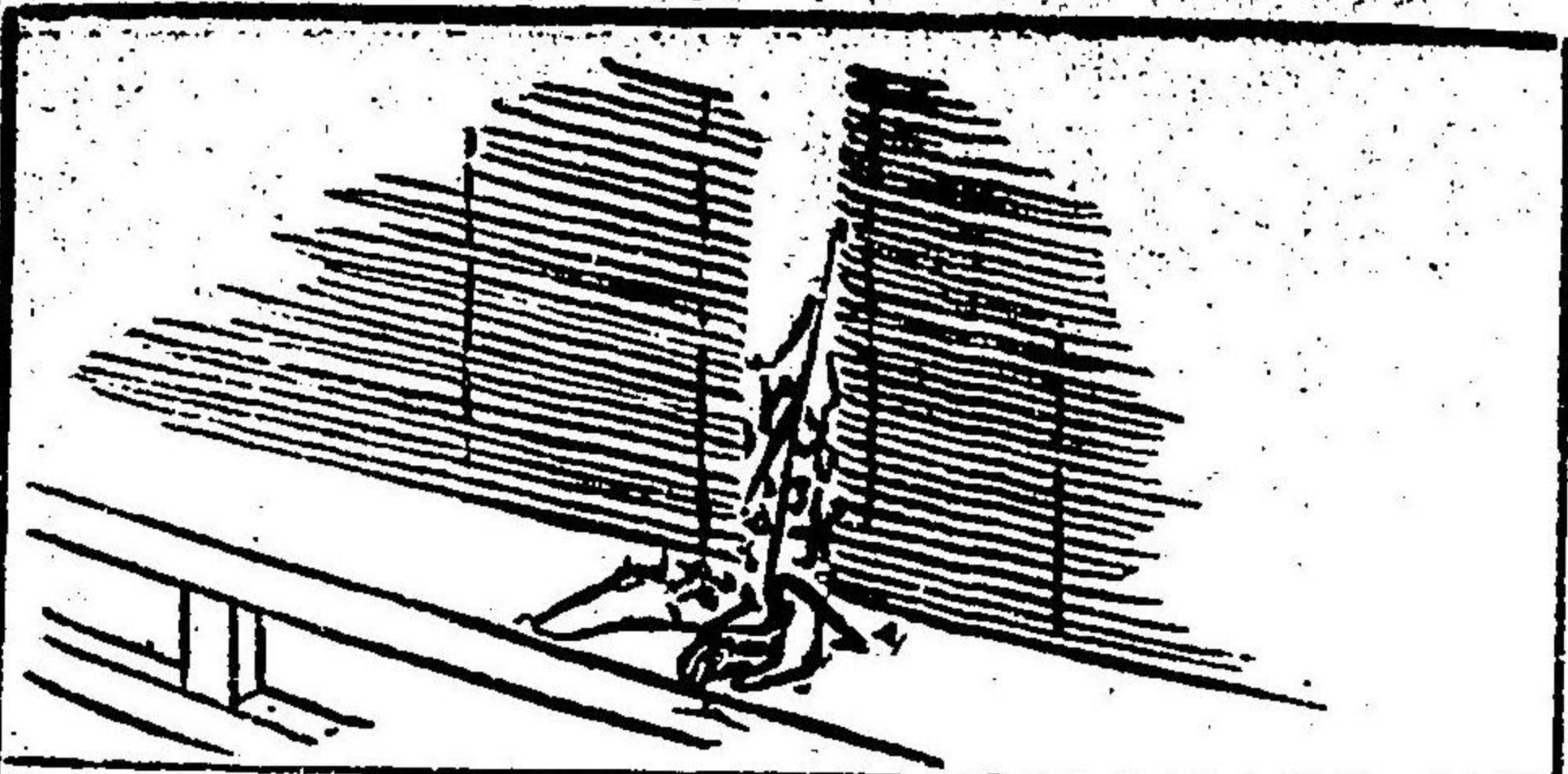
(二七六) 納豆

(二七七) 親子井

(二七八) 梅申(さゝぬもある)

團子

またこれと反対に  
二段に並べること  
も損である、何故  
かと云ふに横に長  
い場所を取つて一  
目に見渡すことが  
出来ない  
それ故に並べ方は  
先づ三段にするの  
が最も便利である  
さうすれば場所も



(二七九) 甘み送る(尼見送る)

(二八〇) 砂糖の進物

(二八一) お里(砂糖)

(二八二) 花見砂糖(座頭)

(二八三) 食得ん

食鹽

(二八四) 油揚

(二八五) す四(鯨)

(二八六) ダニガツク

佃煮

割合に少く又見る  
のにも見易い、け  
れども一枚札とか  
特に目立つ札など  
は場合によつて四  
段としその札を一  
番下の段に並べる  
も宜い  
並べ方には出来る丈  
速かにせねばなら  
ぬ、いつまでもぐ



本文

判官御手を

取りた  
まひ



冬瓜

御手に

とり玉ひ

(二八三) 無道の豆でおじやる

葡萄豆

(二八四) 朝鮮雨

朝鮮飴

(二八五) 擬す毛

儀助養

(二八六) カラ

豆腐の滓

(二八七) はんべん

(二八八) 瘤薪

ズくして居ると敵にスツカリ見られてしまふ何でも先んずれば人を制すおくるれば人に制せられるといふことがあるから自分の札はツツサと早く並べ一わたり目を通してどの札が何處にあるかが

本文

口から

高野



口辛ら

坊や

葛布巻

(二八九) 西女

煮染

(二九〇) 黒くなつてひ上がる

淺草海苔

題 題引 (其六)

氣不氣兮心不心。當籤何物無慮深。折柄持來新枕。二。願爲眞紅。紅入陸。

いふことをよく記憶した後更に敵の札を見通すやうにせねばならぬ並べ方が整ふといよく戦争が初まるのである、一秒一刹那の働き、巧妙なる手腕を現はすはこの時からである、いよく開

本文

ふりさけ

見れば

春日なる

ふり酒

見れば

幽なる

飲料品

(一九二) 紫

醤油

(一九三) 花盛り

瓶入酒

(一九四) 名士

銘酒

(一九五) 正宗

正宗瓶詰

戦といふことにな  
ると慣れない中は  
敵に取られない  
やう一生懸命に自  
分の札斗りを守つ  
て居るがそれでは  
勝つことは覺束な  
い進んで敵の札を  
取る様に攻勢に立  
たねばならぬ時に  
よつては自分の札



(一九六) 澤の鶴

(一九七) エビスビール

(一九八) きいて涙が出る

(一九九) 小性

(二〇〇) 芥子

(二〇一) 胡椒

(二〇二) 若葉

(二〇三) 上茶一斤

(二〇四) 牛ニユーツ

(二〇五) 牛乳

を取られても構は  
ず敵の陣屋を目が  
けて攻め立てる方  
が利益なこともあ  
る併し戦ひが始ま  
つたばかりの時は  
双方とも持ち札が  
澤山ある故ウツカ  
リ敵の札に手をつ  
けることは出来ぬ  
先づ第一に自分の

本文  
借老同穴

契りの

蛙豪的

日和の

(三〇二) 来いチャイ

濃茶

(三〇三) 皇妃 珈琲

(三〇四) 奏す ソー酢

(三〇五) 妻ダー シトロン

(三〇六) サイダー

方を守つて終り際  
に近づくと大膽に  
敵の方へ攻め寄せ  
るのがよい  
それから敵の札を  
見るのにはなるべ  
く左翼(自分の方  
から見)右翼)に  
あるのをさきにと  
る様に心懸るがよ  
い何故かと云へば



(三〇七) 氷見す 氷水

(三〇八) 佛 閣 シンジャ

(三〇九) 名惜し ブツカク(氷)

(三〇六) 直し酒

敵の方では右翼の  
札よりも左翼の札  
の方が取りにくい  
而して自分の方が  
らはちやうどその  
反對に右の手を伸  
して敵の左翼の札  
を取るのが餘程取  
やすいからである  
つまり取り方や見  
方は絶え間なき注

本文

嫁が

姑に

なる

米が

しん粉に

なる

荒物

(三〇) 土ツカズ 上草履

(三一) ちを吐く 草帯

(三二) 月を吐く 灰吐

(三三) 浅草の神 浅草紙

意と敏捷なる手の運動とが最も肝要

なことなのである

實に注意と機敏とはカルタ取りの第一の武器である

花カルタ遊び

花台せ

人数は三人以上六人以下である勝敗



(三四) 置ランプ

(三五) 豆ランプ

(三六) 洋字(楊子)

(三七) 川向き 皮むき

(三八) よつみ 箕四個

(三九) 苦勞 ろうそく九本

(四〇) トラップ

を調べる便宜として

て敷取がある特別

に作つたものもある

れど普通茶石を代

用する即ち白石一

個を一貫黒石十二

個を一貫として、

白四個と黒十二個

計五貫を銘々に渡

す、次に札を一枚

宛配り月の配序成



本文 お前 百まで

慈姑 百まで

【解】産物

(三三) 洋燈十

(三三) 八郎 ろうそく八本

(三三) 五郎十郎 ろうそく十五本

(三三) 日本の寶器 第二本

(三四) 刈萱 かるかやたわし

(三五) 日本橋箸二本

花ガルメ遊び

は點數の多きものによりて親を定める親は札を配り打出しの役を勤めるので割のよい者ではない、配り方は能くきり先づ銘々に四枚宛配つて場に三枚を表向に並べ次に又三枚宛配つて場に三枚を出

本文 一は萬物の はじまり



無知は 頑物の 爺なり

爺なり

【解】産物

(三六) お前まぢり

(三七) 行先が安じられる まつち二箱 プラ提灯

(三八) 妻かけ(爪掛)

(三九) ライオン ライオン齒磨

(四〇) 火消壺

(四一) 神の加護 紙屑籠

花ガルメ遊び

す即ち銘々の手に七枚宛配ることとなる六人である一枚も残らないが六人以下で残りの札のある時は之を裏向に積み重ねて出して置く借實際の遊びは何時もある三人なので四人ならば一人五人なら

本文

あとは

野となれ

山参り

あとは

糸なれ

山まゆも

(三三) さつきの次だ

アヤメ煙草

(三三) さして出る

蛇の目傘

(三四) 四分内輪

遊團扇

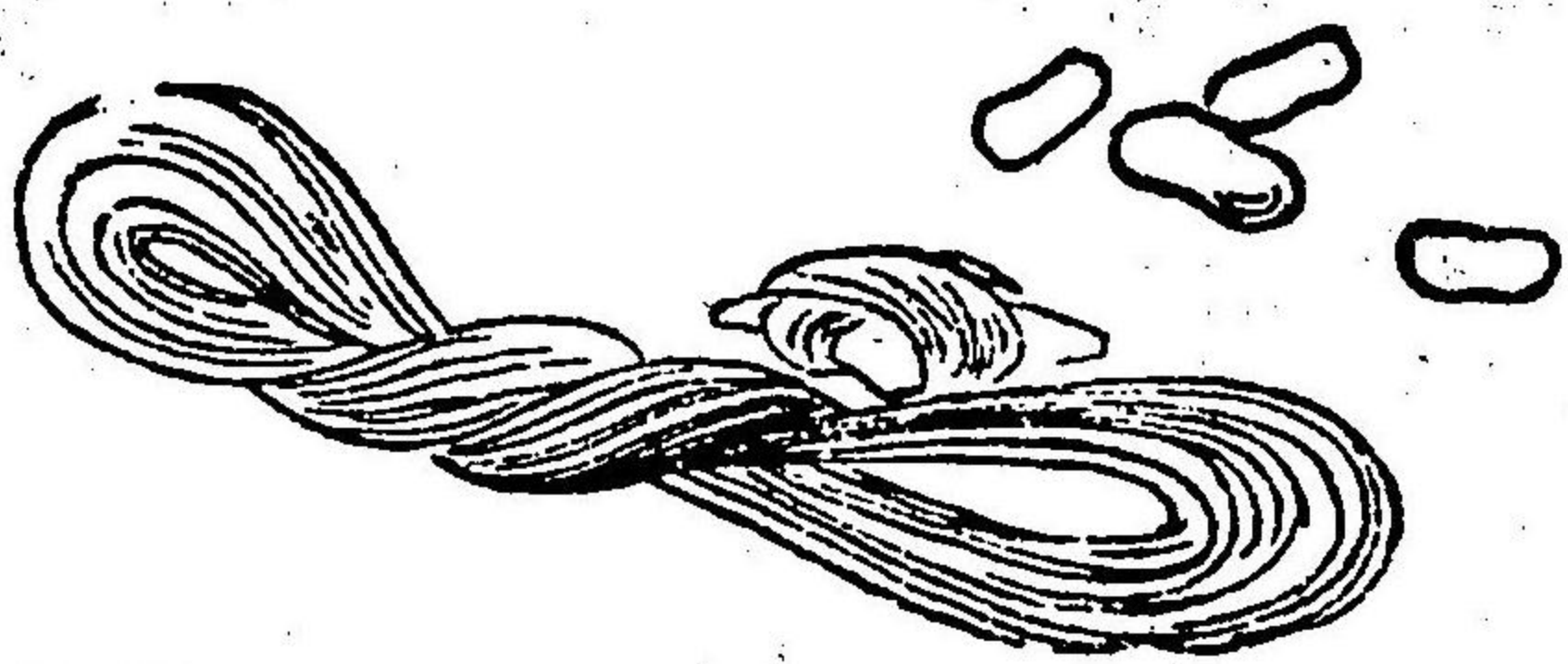
(三五) はいて葉齒をへらす

下駄

(三六) 香妻

あづま下駄

ば二人六人ならば  
三人は一勝負を休  
まねばならぬそれ  
には配られた自分  
の札を見て思はし  
からぬものが親か  
ら右廻しに段々に  
落るのである若し  
人数が五人で親と  
其右手の二人が落  
ちるとなれば残り



(三七) 鯨

ものさし

(三八) ゆきたけつもる

鯨尺

(三九) 田ドン

炭團

(四〇) 枯木澤山

薪一把

(四一) 見ず(水)に受く(浮く)

軽石

二人は嫌でも應で  
も行らねばならぬ  
のであるが其場の  
約束にて二人でも  
場は開かれるので  
ある、さて愈々三  
人なり二人なりで  
戦闘開始となると  
親となりし第一席  
の者が我手の札と  
場の札とを見駈て

本文

成り田

不動

生り

たる

葡萄

(三四) シカゴ

籠四ツ

(三五) 我身を捨て、人の命を救ふ

貝杓子

(三六) 口中(校中)を掃除する

齒磨楊子

(三七) 待乳山

マツチ澤山

(三八) 小楊子

(三九) 一本歯の下駄

手の櫻と場の櫻

手の牡丹と場の牡丹

と云ふ様に同じ種類の札を合せ

取つてから重ねた

札を一枚撥つて表

向に場に並べる若

し其撥つた札と同

じ種類の札が場に

あるとそれをも行

せて取るのである



(四〇) いろいろの文句が出る

郵便函

(四一) 隔取

すみとり

(四二) 案山子

箆と笠

(四三) 藤に牡丹

ふじにばたん(煙草)

(四四) 位暗いによつてつける

ランプ

されば旨く書ると

一度に四枚の札を

取ることが出来る

が一枚もとれぬ事

もある斯して順々

に廻して三人の手

の札が無くなり又

場の重なりたる札

が無くなる時を終

りとするのである

そこで札の點數計

本文

勇みは

水に

よるならん

兎は

水に

弱る

らん

賣藥

(三五) 一本はさゝぬ

線香

(三五) 通ひ(香好い)もある

線香

(三五) 遺產(胃散)

(三五) 達算(胃散)

(三五) 十層

重曹

算は總計二百六十

四點を三分した八

十八點を平均點と

しこれが少きもの

は碁石にて其數を

補ひ多きものは多

き丈碁石を受ける

のである

トランプ遊び

トランプの解

(三五) 三役(散藥)

(三五) アレシラズ

(三五) カオル

香錠

(三五) 荒ひ子

洗ひ粉

(三五) 枝中(口中)を涼しくする

ハツカ

(三五) 池の端で賣る

賣丹

トランプとは赤

色のハート(心

臟)とダイヤ(金

剛石)と黒色の

クラブ(和蘭陀

げんげ)スベ

ト(西洋勤)の

四種に分れ各種

が十三枚にて都

合五十二枚から

成り立つたもの





本文

向ふ

通るは

ないか

向ふ

通るは

ないか

(三六)

又明曉

明 辨

(三五)

赤さ心を示す

清心丹

(三六)

目を直す

精銻水

(三七)

萬金膏

(三八)

實母散

(三九)

政府黨

清鮮湯

であるその十三

枚の順序を云ふ

と一點(A)、

王、女王、兵隊

十點、九點、八

點、七點、六點

五點、四點、三

點、二點で數の

少きものは多き

ものに勝つので

兵隊は女王に女

王は王に王は一

點に打勝つこと

は出來ぬもので

あるが遊戯の種

類に依りては變

化する事がある

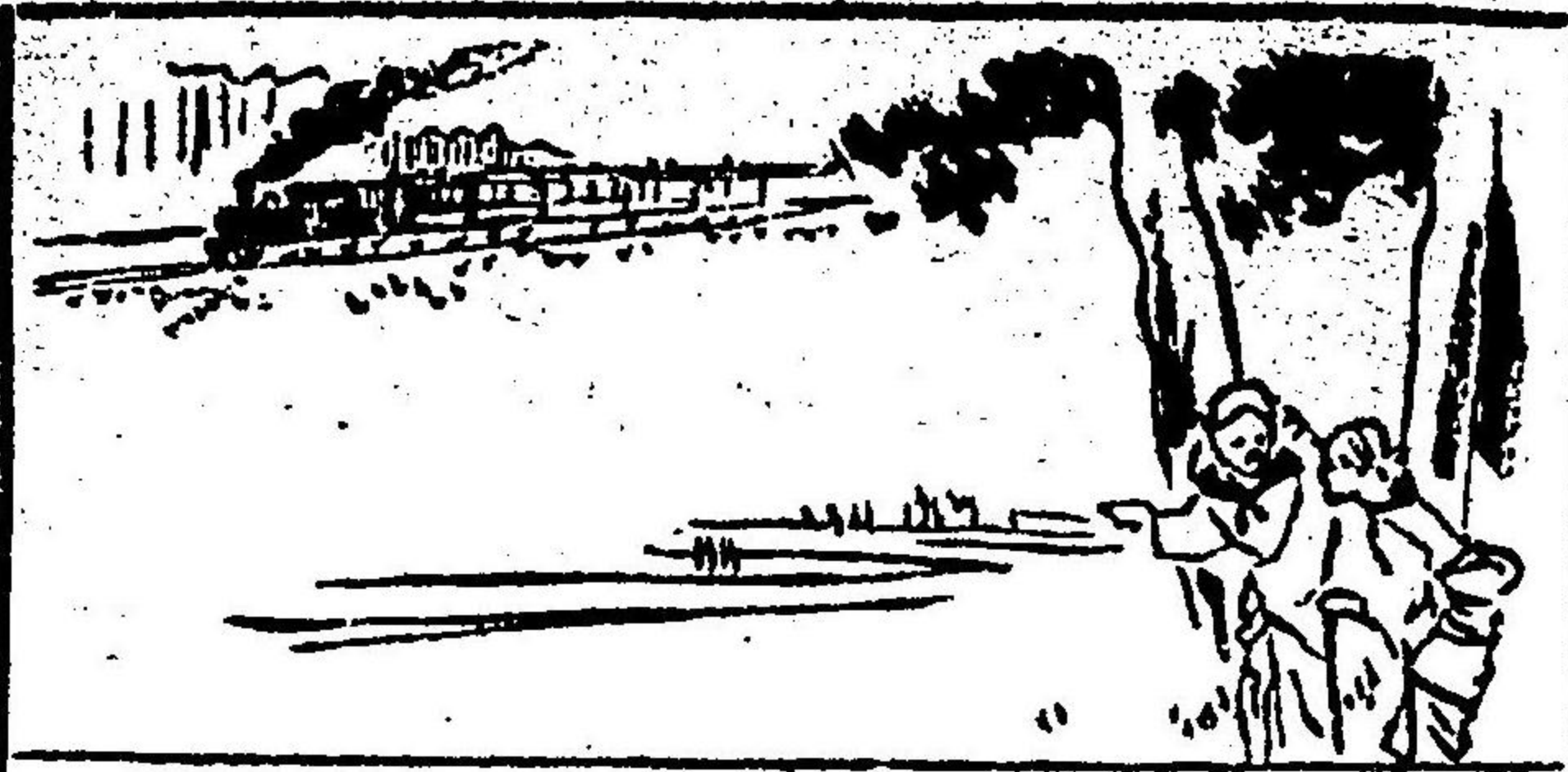
繪取り

普通四人の遊びで

先づ位の異つた札

四枚を混交て銘々

に配り、高位二點と



(四〇)

積土樓

江戸樓

本文

あいた口  
ふさがらぬ



書いた藤

ぶら

下る

書籍

(三七) 歌文の規則  
日本文典

(三七) 正雪が主(小説が主)  
文藝倶楽部

(三七) 一日づつ薄くなる  
引剌しの曆

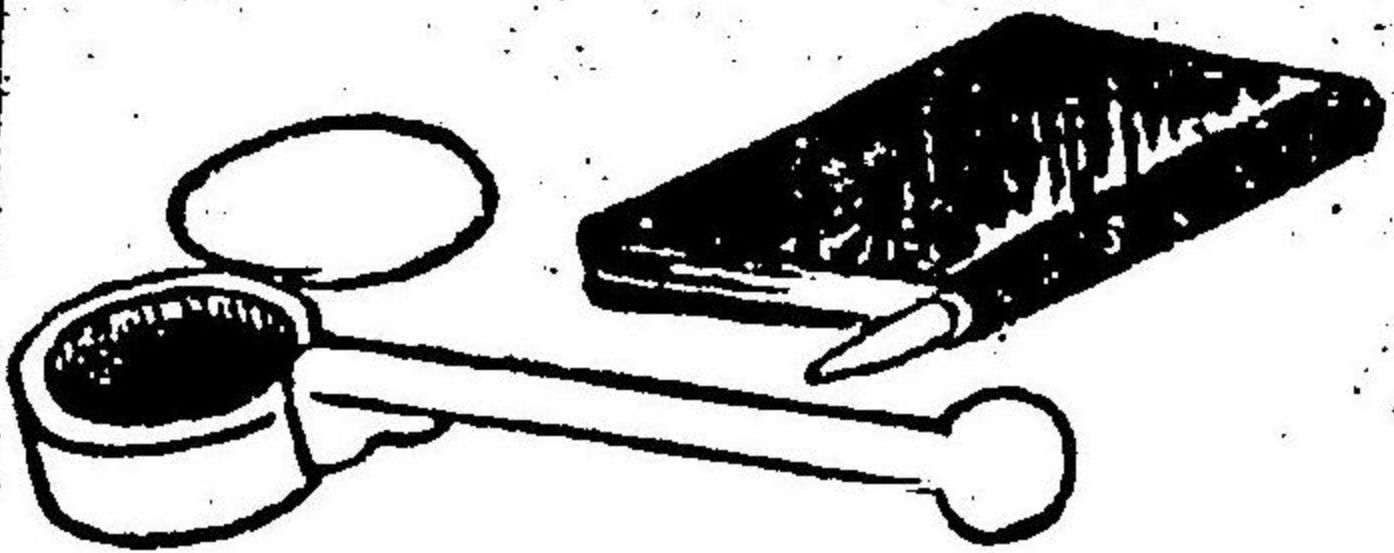
(三七) 資本  
本四冊

低位二點を組み合わせ味方同志向き合ひに併く坐るのである次は札配り役であるがこれは前の組分けの一番低いものが勤めるのであるが一度勝負が定まれば其次は左隣のものゝ順に勤める

本文

とめて見よなら  
茶種に小蝶

とめに見よなら  
矢立  
帳に手



(三七) おしる  
おし給

(三七) プック  
本二冊

(三七) 雷  
來記

(三七) 地所  
辭書

(三七) 内外を照す  
英和辭典

さて札を配るには全體をよく混交て之を重なつた儘右手に置くと右隣の手は其内のイクラかを取り之を其傍に置く札配りは手に残つたものを右から順々に一枚づつ配る(先に隣のものゝ取り置き

(二八〇) 淫ぼん(院本) 淨瑠璃本  
 (二八一) 海中に月 懐中日記  
 本文  
 なま揚げ  
 雁もどき

(二八二) いろは文庫  
 (二八三) 太平氣 太平記  
 (二八四) 源平盛衰記  
 (二八五) 和合の陣 和合人

繪馬上げ  
 願ぼどき

(二八六) 蚊が騒動 加賀騒動  
 (二八七) ペイ〜郷談 皿皿郷談  
 (二八八) 本厄(翻譯)だ 經國美談  
 (二八九) いろは字引  
 (二九〇) 游泳術  
 (二九一) かち〜山  
 (二九二) 大學

しもの迄) 銘々十  
 三枚宛を得ると表  
 を自分の方に向け  
 人に見えぬ様札を  
 揃へる揃へ方は同  
 じ種類の中でも位  
 の順に揃へるので  
 ある若し此配られ  
 た札の内に四種類  
 の者一種類一枚も  
 ないことがあるば



更に配り變へる  
 次に切札であるが  
 これは普通ハート  
 ダイヤ、クラブの  
 三種を一回毎に變  
 へるか或は札を混  
 交て居る時出鱈目  
 に中程の一枚を出  
 して定める併しス  
 ペート丈は切札と  
 することが出来ぬ

本文  
富士の

登山

不時の

お産

(三九三) 孟子

(三九四) 日本書し

(三九五) 日本外史

(三九六) 三國誌

(三九七) 名將致死

(三九八) 名勝地誌

(三九九) 網の働き

(四〇〇) 羅生門

(四〇一) おもて計りで(うらないの本)

さて此繪取りは各  
種類の一點と、王  
と女王と兵隊即ち  
合計十六枚の繪札  
を成丈多く味方に  
取らうとするので  
即ち取つた繪札が  
八枚宛なら無勝負  
九枚以上なれば一  
枚に付一點の勝と  
なるのである尙更



文房具

(三〇〇) 壯士(草紙)

(三〇一) 警視(野紙)

(三〇二) 錫杖

尺度状袋

(三〇三) 褒賞

奉書

(三〇四) 質朴

筆墨

に詳しく其方法を  
説明せんに  
甲乙丙丁の四人の  
内甲丙と乙丁が組  
合ふとして、甲が  
先づクラブの三點  
を出すと假定する  
と、乙も丙も丁も  
皆クラブを出さね  
ばならぬ、假に乙  
は五點丙は三點丁

本文

謹上

再拜

錦魚

采配

(三〇五) すつて苦勞(黒う)する

墨

(三〇六) 墨田(墨ダ)

(三〇七) 艶筆(鉛筆)

(三〇八) 内府(ナイフ)

(三〇九) おかもあり海もある

硯

(三一〇) 筆戦(筆洗)

(三一〇) 玉揃ひ

十露盤

は八點を出すとする  
ると其内では丁が  
高點だから次には  
丁が打出し役とな  
る而して其出した  
四枚の内には一つ  
も繪札がないから  
之を裏向けにて真  
中(場)に伏せてし  
まふ、次に丁は又  
スベートでも出し



(三一三) 必死に勤勉

筆紙金ペン

(三一三) 曳いたりかけたり

算盤

(三一四) 内輪

うちわ

(三一五) 切てしまひ

切手四枚

(三一六) すぐに晴れ(張れ)

切手

前と同じ様に順々  
に一枚宛出して高  
點者が次の打出し  
役を勤めるのであ  
るが若し打出しの  
者の出した札があ  
れば否でも應でも  
それを出さねばな  
らぬので萬一一枚  
もなかつたならば  
切札を出すか或は

本文

兄嗣信が

胸板に

鰐口の

緒が

皆いたみ

(三二七) 百はがき

葉書百枚

(三二八) 半分受けて半分返へす

往復はがき

(三二九) 戦死

扇子四本

(三三〇) 半死半生

半紙半帖

(三三一) 養子(洋紙)

(三三二) 陰氣(墨汁)

外の種類のものを

出すのである切札

を出せば次の打出

し役を勤めねばな

らぬが外の種類の

ものを出せば棄て

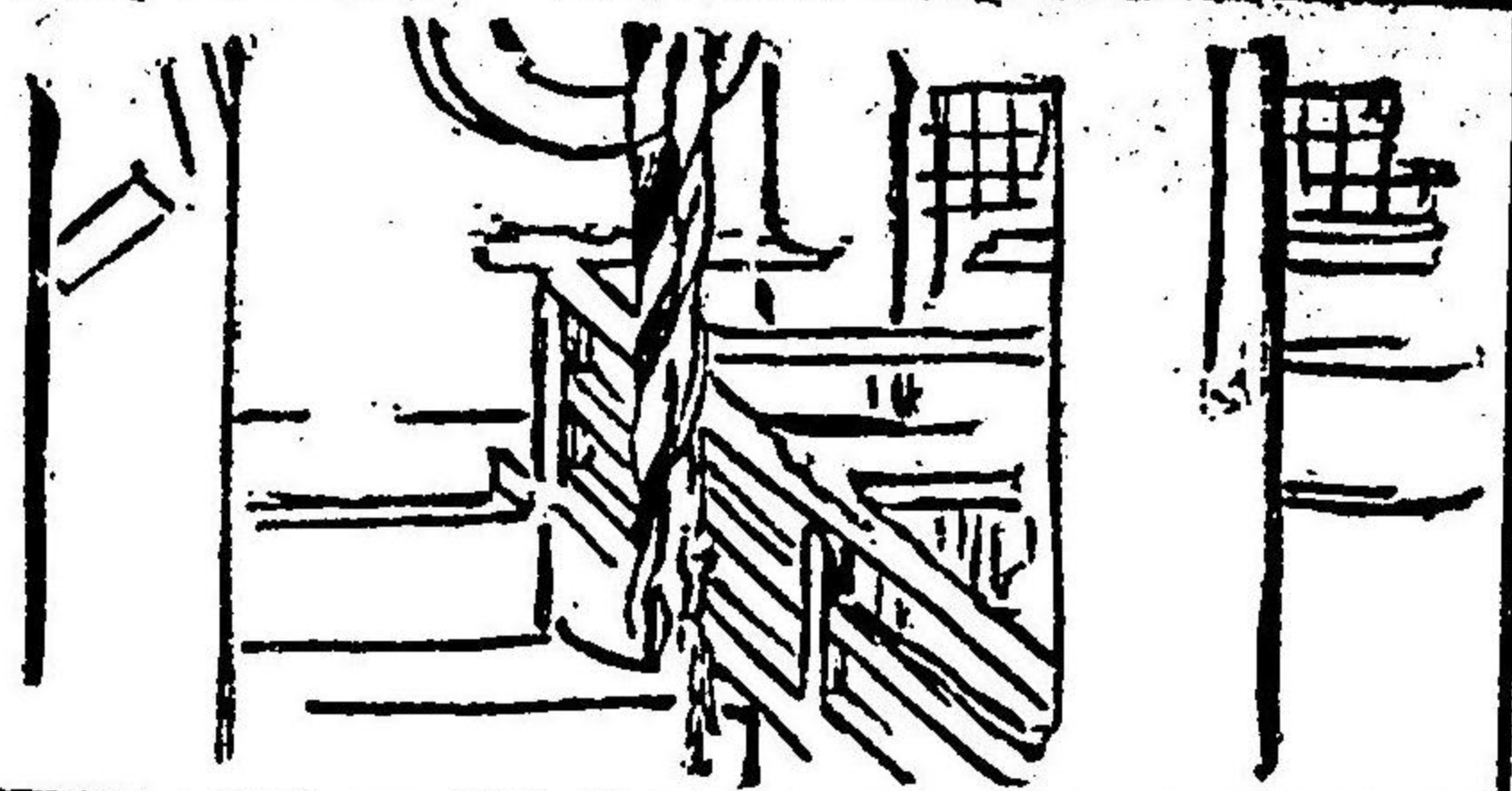
ると云ふて例令其

種類では高い札で

あるとも何の力も

無いもので即ちダ

イヤの三點と五點



(三三三) 落葉のかきよせ

端書

(三三四) 苞苴

奉書一帖

(三三五) 尻で消す

鉛筆

(三三六) 黙で(筆)集まる

筆筒

(三三七) 坊主になつて世をのがる

筆

と十點が出た時ク

ラブの兵隊を出し

ても効力なくダイ

ヤの十點に取られ

て了ふのである、

尤もダイヤの十點

が味方の出したも

のであつて自分の

クラブの兵隊が後

に餘り功を奏さな

い時には態と之を

花 卉

本文  
三更月を  
踏んで來たる

チヤン公  
鋤を  
積んで來たる

(三六) 何點(南天)ダ

(三五) 不用(芙蓉)

(三四) 睡(椿)

(三三) 歸京(桔梗)

(三二) 勾配(紅梅)

(三一) 公賣(紅梅)

(三〇) アサガホ

朝顔

棄てるのも利益である若し又切り札が二枚出た時は高點のものが勝となるのである、此様な有様であるから切札の王や女王や兵隊並にA點などは非常の勢力を持つて居るものであるけれども一つ之



(三五) プーノならす

(三六) 水戦 酸漿

(三七) 水仙

(三八) 花勝負 水仙

(三九) 花菖蒲

(四〇) 扶持(藤)

(四一) ボタン

(四二) 牡丹

(四三) 狼狽(蠟梅)

(四四) 狼狽(蠟梅)

にも増して力の強いものがあるそれはスペートの一點即ちスペキュレシヨンである、之が出ない内は切札の一點と雖も一向安心が出来ないのであるから敵が此札を持つて居ると見ると征伐を續け

本文  
月にひら雲  
花に風

鋤は村方  
濱に櫓

(三四一) おもと

萬年青

(三四二) パラク

薔薇二本

(三四三) 藪小路

藪柑子

(三四四) 庭は梅

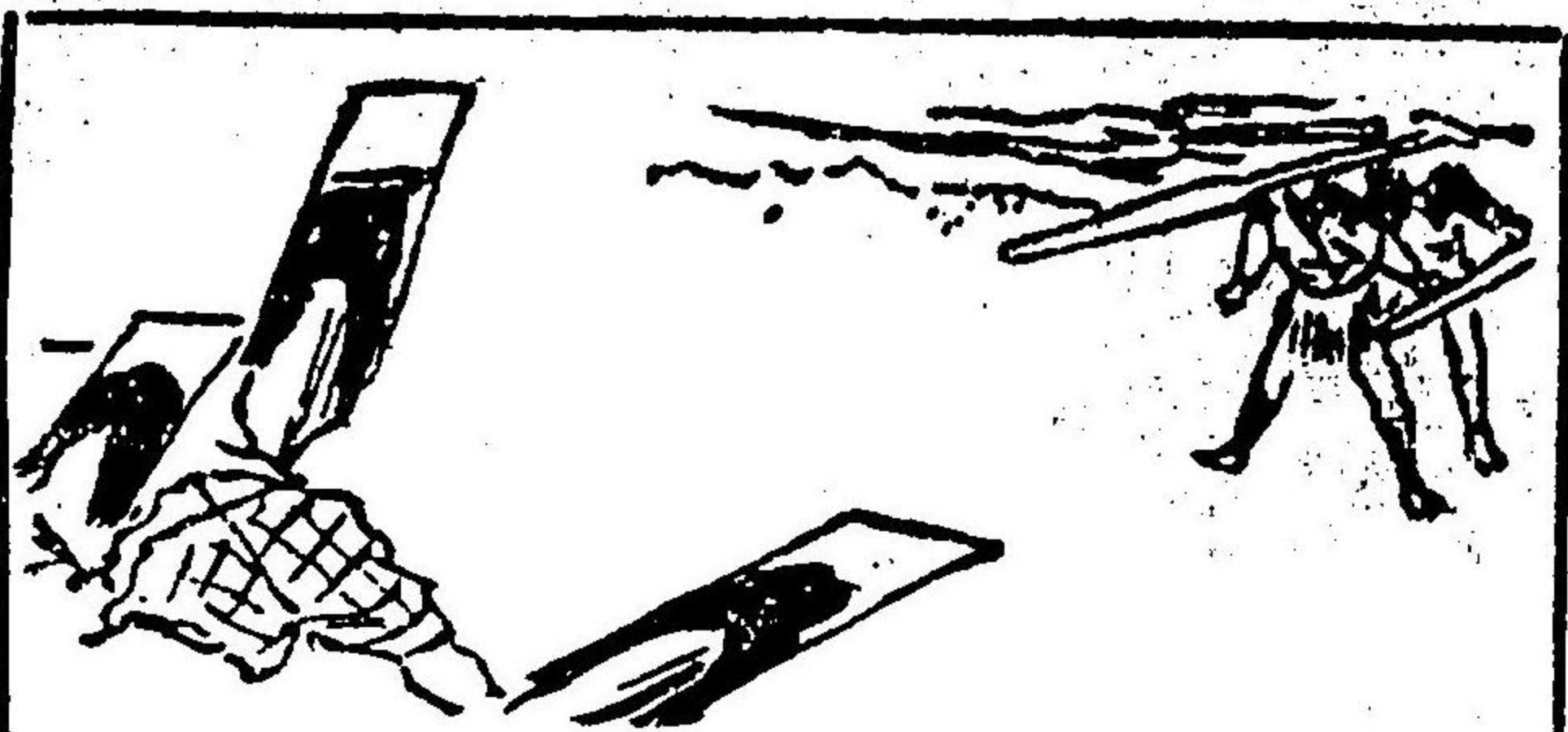
庭梅

(三四五) 星が戀しい

星

打死する様する

ものである、この  
恨るべきスベキユ  
レーションは如何  
なる力を持つかと  
云ふに、随時に出  
す事を得る特権が  
ある縦令普通なら  
我手に出すべき札  
のある時でも都合  
によれば其札を置



(三四六) 一軸(無花果)でムい

(三四七) 千段(せんだん)でムい

(三四八) 開かぬ内がよし

さくら

(三四九) みがない

山吹の花

いて之を出すこと

が出来る例せば甲  
がダイヤの兵士乙  
はダイヤの王内は  
我手にダイヤなき  
を幸ひ宜き敵御参  
なれと切札の一點  
を出して取らうと  
すると丁は我が手  
にダイヤの九點は  
あつても見すく



本文

地獄で

佛

白首で

巫山戯

玩弄品

(三五〇) 金銀がなければ出来ぬ

將棋の駒

(三五二) 尻が重い

達磨

(三五三) 倒れては又起る

達磨

(三五四) 上げたり下げたり

紙重

繪札三枚を敵に渡すを残念に思ひスベキエレーシヨン

を出して之を取て了ふと云ふことである、かゝるおそろしき暴力を持つもの故、若しも敵にあると感付きたる時はドシ〜征伐を行ふのである



(三五五) かるく空中に舞ふ

風船

(三五五) 形(肩)にのせてうつ

小鼓

(三五六) 拜見(佩劍)

總てからくり

機械人形

(三五八) 眞棒がかんじん

獨樂

(三五九) 娼妓(將基)

その征伐はスベートを打出す事です

にスペートの或物がなく只スベキエレーシヨンのみ持つ時は不得已出さねばならぬからである

かくて毎回取つた繪札は味方の膝下に取り置き外の札

に

本文

高天ヶ原に

神とまる

婆様が

鼻に

蟹とま

る

(三〇) 廻つては上る

道中双六

(三一) 上下のたのしみ

歌がるた

(三二) 呼(讀む)で下の苦をとる

歌がるた

(三三) 人魚(人形)

(三四) 季寄せ(寄木細工)

(三五) イツデモ若い

雛人形

は悉く真中に俯向

けに置くので最後

に一同の手に札が

なくなりし時源平

二組の取つた給札

を調べて勝敗を定

めるのである

尙以上に付て更に

此遊びに關する心

得を擧げる

(1) 味方は成るべく



(三六) おあしがない

(三七) 練で操る

(三八) トランプ

(三九) 質屋(矢七本)

(四〇) つめたい(將基)

(四一) 十五夜(矢十五本)

(四二) 演歩行(破魔弓)

西洋骨牌

紙鳶

達磨

おあしがない

後手に打出すが可

い即ち我は成るべ

く點數の少ない少

くとも敵のより少

ない札を出す様に

する後手に打出す

利益は例せば他の

三人が皆クラブの

點札を出し居る時

我手にクラブの兵

隊あれば之を出て

本文

東男に

京女

手づま

男に

蝶女

(三七三) つけば上る

手鞠

(三七四) 花を催す

花札

(三七五) てんどんく

太鼓大小二個

(三七六) おしるを曾ぶ

羽子板

(三七七) 強き方につき廻る

風車

繪札を一枚とつて

置くの類である兵

士や女王は繪札の

中でも弱いもので

あつて動ともすれ

ば敵にせしめられ

るから之を味方の

手に納めるやうに

工夫をすること

ある

(2) 最初打出しの役



(三七八) 羽を並べる

竹に挟みたる羽子

(三七九) 裏におしるがある

羽子板

(三八〇) イキでふくらむ

空気枕

(三八二) 原でボンク

狸

(三八三) 重罪

金庫

に當つた者は成た

け札数の多い種類

の中で一番低いの

を打出すがよい

(3) 札数の少ない種類

からは最切に打出

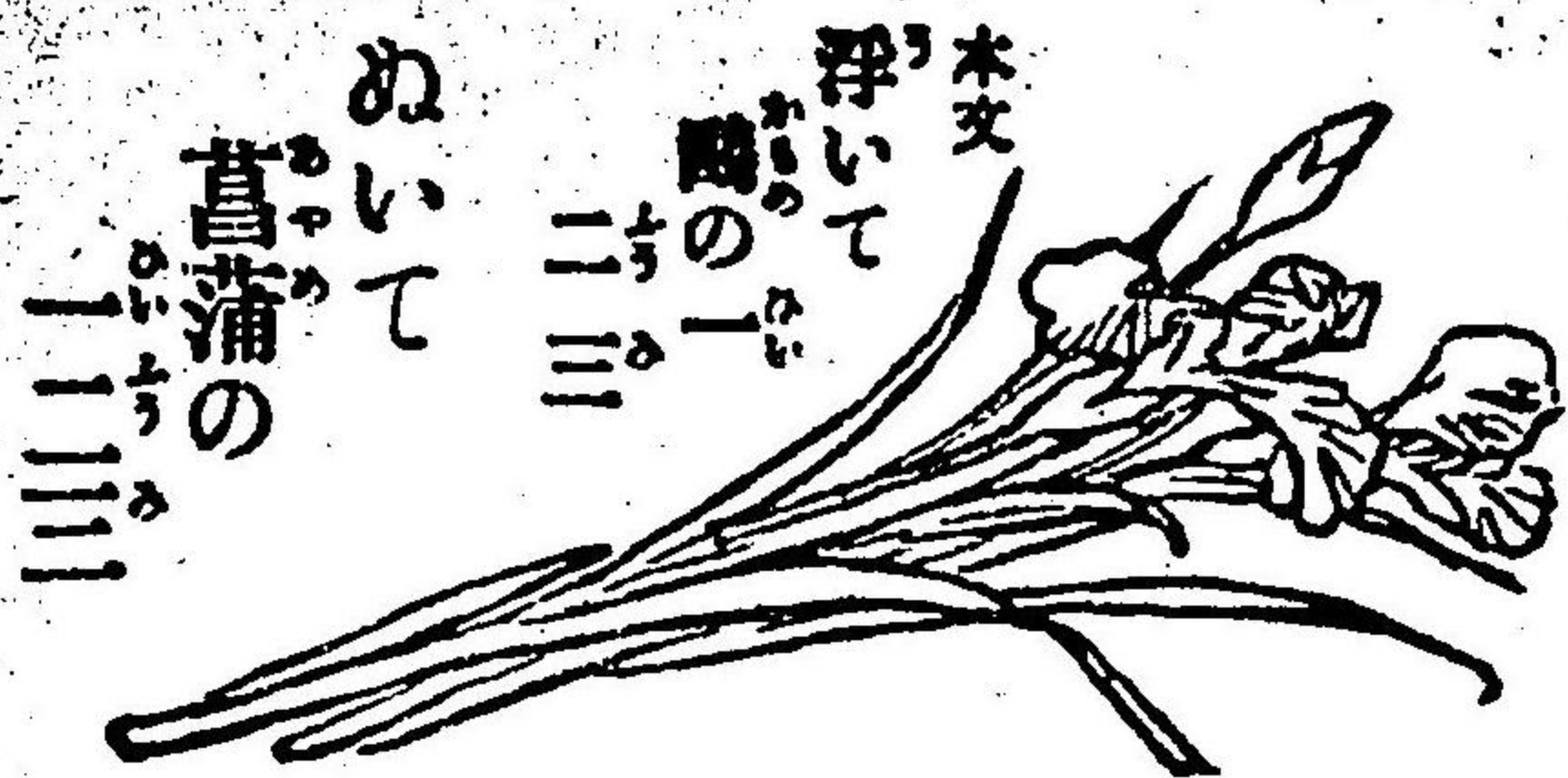
さぬ方が可い

(4) 若し同種の繪札

が三枚もある時例

せばダイヤの一點

王、女王とありし



本文 浮いて  
二三四  
ぬいて  
草蒲の  
一一二二三

(三八三) 女につかれる

羽子板

(三八四) 總身に智慧は廻り兼ね

角力

(三八五) 海中徒刑

懐中時計

(三八六) 切らねば用ゐられん

花骨牌

(三八七) 尺八

(三八八) 縁結ふ(箱)

時、一點から順々に其繪札を打出すのがよい、躊躇すると敵に切られて取られる憂がある(5)札数の少ない種類のは期を見て早く之を出して丁ひ敵が繪札を出すのを覘つて切札を出して之を取る用意



本文 六ツ八  
六ツ八  
ツならば  
風と知  
るべし  
六ツ足  
ならば  
蟹と知  
るべし

(三九〇) 花が高い

天狗の面

(三九〇) 双六のさい

(三九二) 四角間

鹿熊

(三九三) ラクダイ

駱駝猪

(三九三) 那須野にせめられる

九尾の狐

が肝要である(6)味方の一方で皆無の札があると見た時は、己れは其種類の繪札を敵から追出し之を味方に取りらせる工夫を凝すがよい、又此時には安心して其種類の高い札を打出してよい

木文

山高きが

故に

尊からず

矢場たかき

が故に

嘗てよらず

漆器

(三九四) 孟蘭盆(お盆)

(三九五) 臺灣

大きな椀

(三九六) もく拜(木杯)

(三九七) お安直

お椀ト猪口

(三九八) ボン

盆二枚

(7) スペキユレーシ  
ヨンが敵にあると  
思つたら之を追出  
す様にする、若し  
又我手にあつてス  
ペートの札が多く  
ありし時は終り迄  
持つて居て巧に利  
用するが可いが、  
スペートが少くて



(三九九) 橋場ツ子

箸箱

(四〇〇) おめしの時に出る

膳

(四〇一) ツン

椀二

(四〇二) 橋立

箸立

(四〇三) まつくら

枕

敵に追出されさう  
な時には早く折を  
見てスペートの王  
や女王の出で居る  
時を見計ひ之を打  
出さねばならぬ、  
さうでないとき空し  
く打死することが  
多い  
(8) 我手に切札の多  
い時は切札を出し

本文

兄嗣信が

胸板に

鐘撞きの

棒

曲つたに

金物

(四〇四) 黒くなつて夜迄働く

(四〇五) 鍋四ツ

(四〇六) 釘抜

(四〇七) 反対黨が出る

(四〇八) 盤臺と庖刀

(四〇九) ケぬき

(四一〇) 五十九

五徳

て敵の切札を少くし其勢力を殺ぐこ

とも一策である

又切札の少ない時

にも態と之を打出

したりスベキユレ

ーションのある時

にスベートを出し

たりして山を張り

敵を誤魔化す場合

もあれど餘りほめ

た事ではない

(5) 敵なり味方なり

の出した札や皆無

た札や又取つた札

札などは十分記憶

して居らねばなら

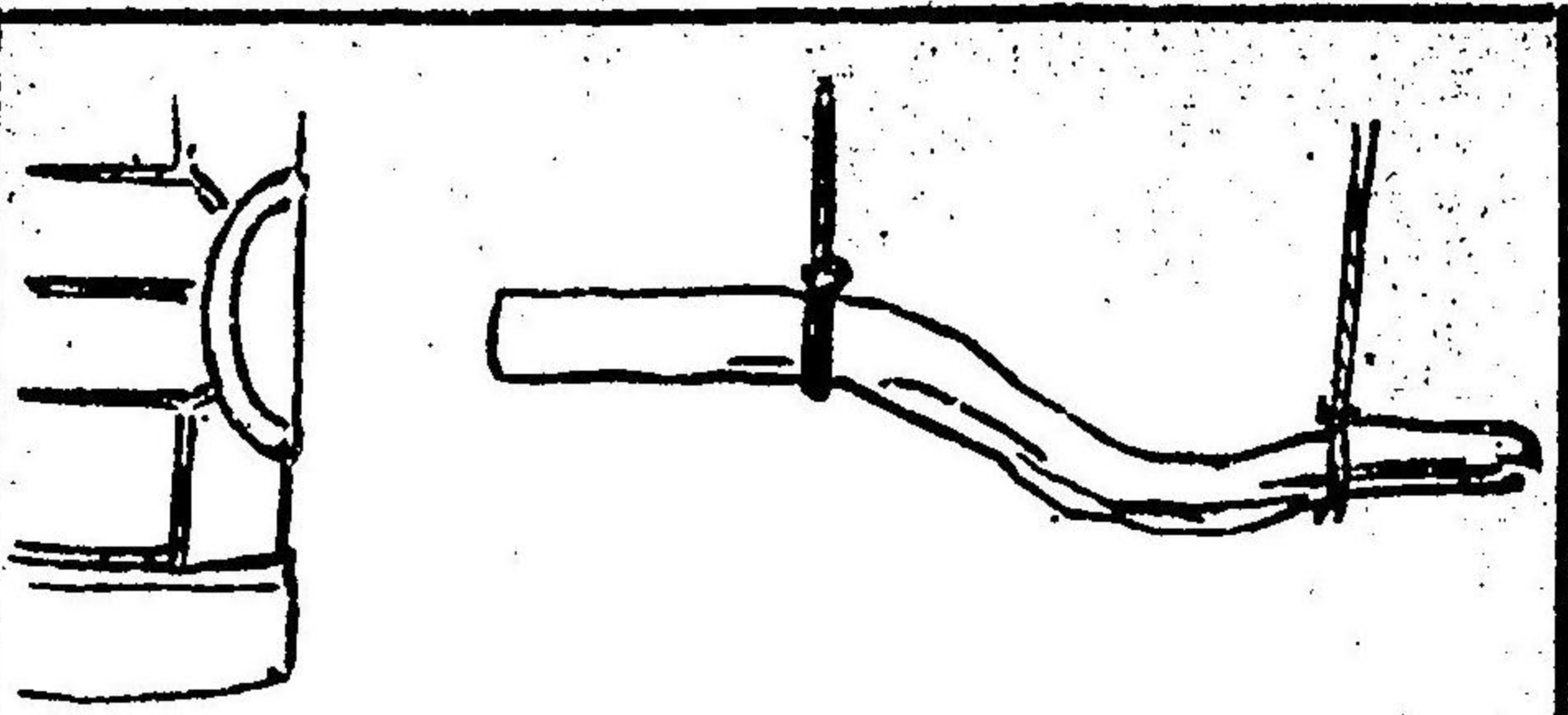
ぬ

ナポレオン

遊び方は前の繪取

りと同じであるが

人数の多い方がよ



(四〇九) もみ(錐)

(四一〇) 安利(鐘)

(四一一) 見切り

(四一二) 錐三本

(四一三) 自在

(四一四) ランプのジナイ

(四一五) 貼る

(四一六) 紙ヤスリ

(四一七) 偽り

(四一八) 針五本

本文

ひじき

行列

行列

(四二五) 氣を揉む 錐

(四二六) 行平 行平鍋

(四二七) 釜

(四二八) 皮むき

(四二九) 出及

(四三〇) 扼腕 藥罐

い、先づ銘々に札を分配して之を調

べ繪札が何枚取れるかを言ひ出て其

一番多い者をナポレオンとなし其他

を連合軍とするのである、連合軍は

ナポレオンに取られない様にする、

ナポレオンは取ら



陶器

(四三三) 平氏(瓶子)

(四三二) 兵士(瓶子)

(四三一) 一枚一本(徳利に皿)

(四三〇) 銚子

(四二九) 壹坪(壺壹個)

(四二八) チヤキ

茶器二

(四二七) サラ(皿二)

うとする仲々勇壯

で宣言した丈の數

が取るればナポレ

オンの勝若し夫れ

以下であつたなれ

は連合軍の勝とな

るのである

●●●●●●●●

ツーランシヤック

此遊びは繪取りと同様であるが、五枚宛銘々に配り後

本文

私しや

本郷に

行く

わいな

渡しや

本所へ

つく

わいな

(四八) 窮す(急須)

(四九) 一直(一猪口)

(五〇) 御前を守る

茶碗

(五一) どんぶりこく

井二

(五二) 佳品

花瓶

(五三) 水を入れる

水サシ

は仰向けに場に重

ねて置く事と槍取

りの様に二人宛組

合ふ事がない、

それに此遊びは槍

札を取らうと狙う

のでなく又別に取

るまいと勤める所

の札もあるのです

それは左の関係から

である



(四四) 硯を充す

水イレ

(四五) アサカホ(便器)

(四六) 湯呑

(四七) カップ

(四八) シヤア

蛙の水入

(四九) 散りれんげ(散る蓮華)

(五〇) ツルサゲル

土瓶

1 切札の二點、十

點、兵士

各々十點

2 スペートの二點

十點、兵士

各々減點十點

3 切札の一點、王、

女王

各々五點

4 スペートの一點

王、女王

各々減點五點



本文

葛西

金町

半田の

稻荷

堅い

金棒

半荷の

荷なり

(四二) 徳利

(四三) 二八

鉢二杯

5 ハート及びクラ

プの一點、王、

女王、兵士、十點

各々一點

右の通りであるか

ら1と3の札を取

り2と4の札は選

けやうとするので

あるが若し減點の

札即ちスペートの

二點、十點、兵士



諸器具

(四三) 日の罰が當る

火鉢

(四四) 子立つ(炬燵)

(四五) ダンス

用箆筒

(四六) あかを流す

据風呂

(四七) 青樓(蒸籠)

と又一點、王、女

王、とを悉く揃へ

て取つたならば前

記の1、3、5の

總點數即ち五十五

點を獨占する特權

がある

●●●●

ポーカー

人数は五六人が一

番よいが二人から

トランプ遊び

本文

あすは

旦那の

稻刈

じゃ

蓮は

旦那の

いやがり

じゃ

(四八) 夜間(薬罐)

(四九) 歯を磨く

(五〇) 金を減す

(五一) 雪を運ぶ

(五二) めしとり

(五三) つる(土瓶のつる)

(五四) むしとり

(五五) つる(土瓶のつる)

ものである、さて

此遊びの目的は五

枚の或組を作らう

とするので其組に

左の九種がある、

表中種とはハート

とかクラブとかの

種類、位とは王と

か女王とかの位

雑とは何んな札で

もよきものをいふ



(四四) 鶴(土瓶のつる)

(四五) ふるい(篩)

(四六) ザル(笊)

(四七) 加護(籠)

(四八) コテ

(四九) コテ二挺

(五〇) 垂る(櫛)

(五一) 億計(桶)

(五二) めざまし

枕時計

のである

一対 同位二枚 一点

例 ハートのジャ

ックとクラブ

のジャックと

雑三枚

例 スベート及ク

ラブの九点と

ハート及クラ

ブの四点と雑

本文  
翠丸

釣り方

河豚

にも

釣り方

【解】 諸器具

(四六二) 竹生人

竹夫人

(四六三) 支那蚊番

支那靴

(四六四) さるぼう

猿暴

(四六五) ごせんがはいる

おはち

(四六六) 位でつける

行燈

トランプ遊び

一枚

スリーカード  
三ツ組と同位三枚三點

例 スペート、ク  
ラブ及ハート

の二點と雜二

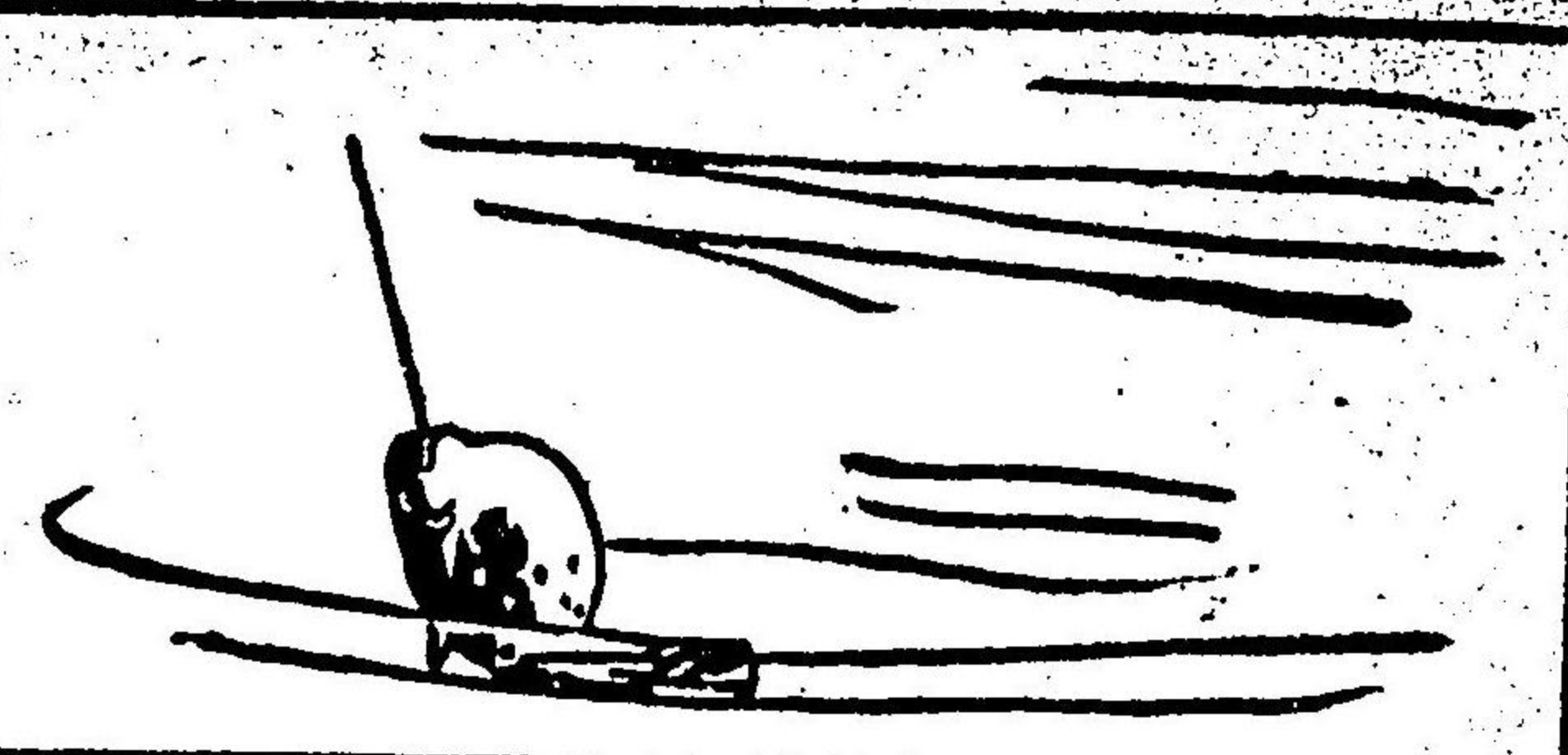
繁がリ 異種五枚  
順を返ふ四點

例 クラブの十點

とダイヤの九

點とスペート

の八點とスベ  
ートの七點と



【解】 諸器具

(四六七) 振つて落とす

ふるい

(四七八) 盆斗り

掛、衝

(四八九) 西洋の水呑

コップ

トランプ遊び

出来る

フラッシュ 同種五點

例 ダイヤの一點

と兵士と十點

フル、ハント 同位

と二點  
と六點

本文

月に風情

待乳山

月に府税

の

増す

地やな

取合物

(四七〇) たいこもち

大根と餅

(四七一) 浄

海 状袋と貝

(四七二) 墨

江 墨と香

(四七三) 切通し

錐唐紙

例クラブ、ハート

ト及びダイヤ

の女王とクラ

ブ及ハートの

三點

四ツ組 四位 八點

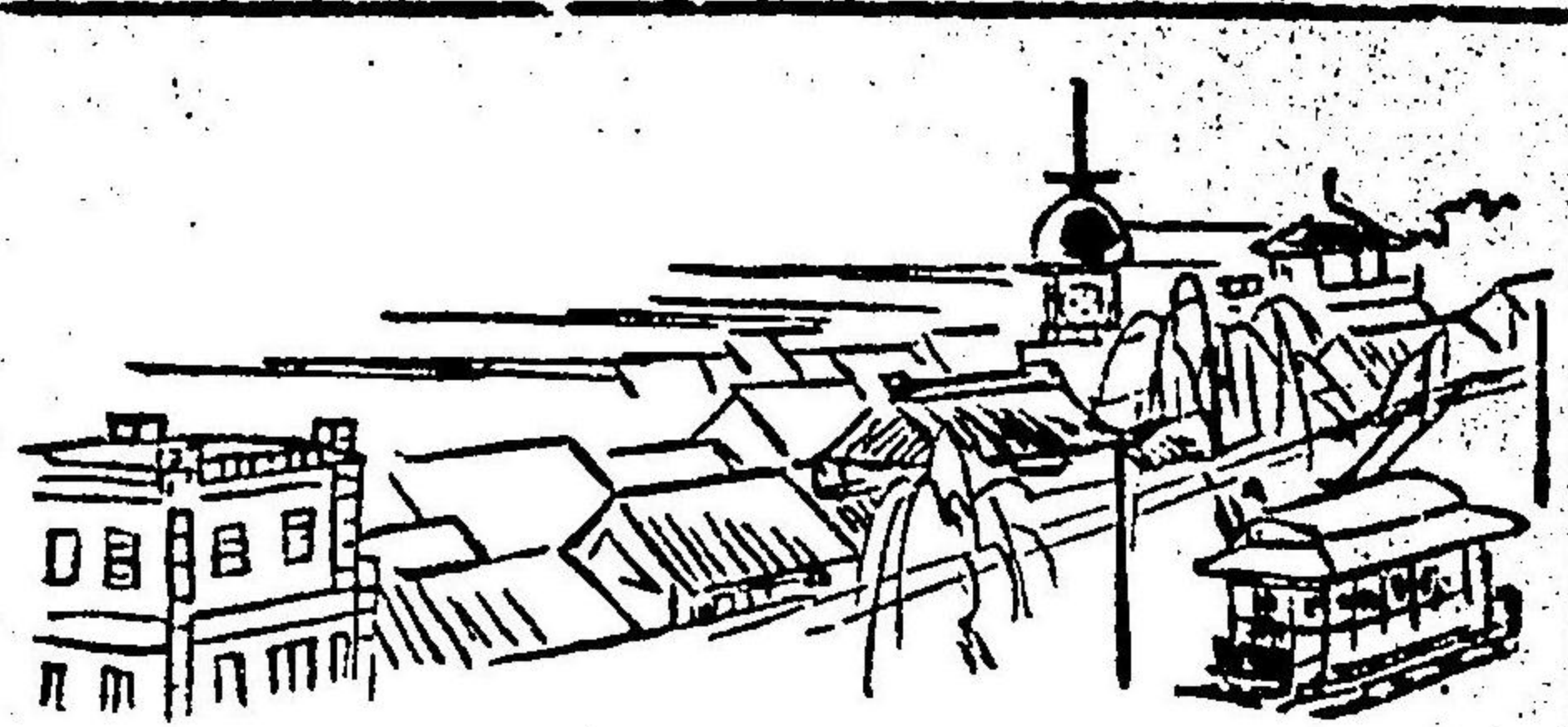
例ハート、クラ

ブ、ダイヤ及

スペードの五

點と雜一枚

純粋繋り 同種五枚 順を返ふ 十點



(四七四) 公侯伯子

香の物白紙

(四七五) 山

山芋と大根おろし

(四七六) 身

身のをはり 簀緒針

(四七七) 簀笠

ポートルース

ステッキとレース糸

(四七八) す

すとんく

例ハートの十點

九點、八點、七

點、及六點

最上繋り 同種一點 以下順次

廿點

例スペードの一

點、王、女王、

兵士及十點

借、遊び方は先づ

銘々に五枚づつ配

り、別に五枚を俯

向けて場に並べる

本文  
竹に雀は

しなよく

とまる

酒に鯛

じや

しなよく

呑める

酢と鐵槌

(四八〇) ぼんくら

盆金庫

(四八一) わりはん

米麥五合の飯

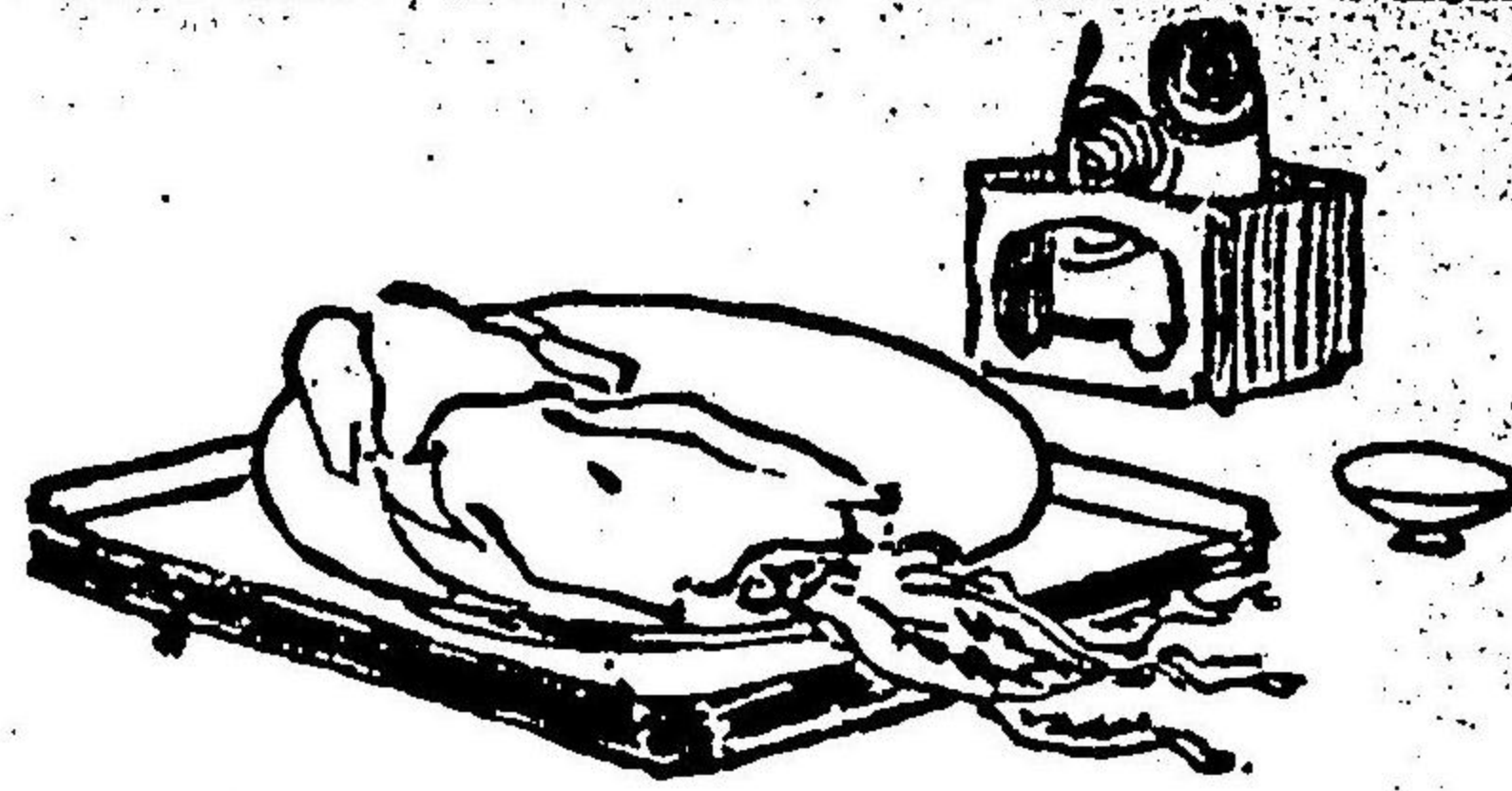
(四八二) 勝負なし

菖蒲梨

(四八三) 盆と正月

盆と生姜

配り手は自分の札を調べ面白くないと見れば其全部を場の札と取換る事の出来る特権がある、若し取換る必要がなければ場の札を表向となす、銘々は自分の札を調べ前記九種の内何れを作らうか、



雑品

(四八四) 細見

債券

(四八五) 次点者

自轉車

(四八六) 蓄音機

水で苦勞する

(四八七) 備後

ポンプ

否、作ることが出来やうかと大體の方針を定め、順々に無用の札を一枚宛場の札と交換するのであるが若し交換すべき札の無い時はパスといつて自分は交換せずして次へ廻す、かくする内何かの組

本  
文  
明日朝顔の

かけ流し

やす朝  
顔のか  
け値  
なし



疊表

(四八九) 格闘

角燈

(四九〇) につこり

行李二

(四九一) 音頭を取る

検温器

(四九二) 克己

國旗

(四九三) 熊手

が出来、自分はこの  
れで満足だと思ふ  
時コールといふ、  
コールといふと今  
一週り即ち其者の  
前席の者迄交換を  
廻しそれで終局と  
する之を三回とか  
五回とか七回とか  
豫じめ定めてある  
回数丈繰返して點

本  
文  
月夜に  
釜を扱



牛乳  
より  
鶏卵  
好く

(四九四) 咳痰

石炭

(四九五) 据風呂

雑巾

(四九六) 象罫

印材

(四九七) 淫罪

眼鏡

(四九八) 目がね

血糊(地の理を見る)

数の多いものを勝  
とするのである  
●●●●●  
クイン抜き  
クイン一枚を取除  
け置き後は一同に  
分配する、そこで  
同じ點数のもの二  
枚揃つたものを棄  
て、左手の人に順  
順に裏を向け隠し  
て一枚を取らせ右



本文  
百番終り

澤

庵

おやり

地圖

(五〇) 道をてらす  
がす燈

(五二) 下がまはらぬ  
石臼

(終)

より左へ順々に廻す間に手に札の無くなつたのを勝とするのである

(終)

編者申す室内遊戯法は其種類數千に及ぶ本書記載せし所のものは其の一に過ぎず、幸ひ、松浦政泰氏編「世界遊戯大全」あり就て御参照あらんことを

刷印日六月十年二十四治明  
行發日九月十年二十四治明

有所權作著

（新装刷引集）

定價金拾八錢

編者 中村青江  
 發行者 大橋新太郎  
 印刷者 市川七作  
 印刷所 博文館印刷所

東京市日本橋區本町三丁目八番地  
 東京市小石川區久野町百〇八番地  
 東京市小石川區久野町百〇八番地

館文博元兌發

東京市日本橋區本町三丁目八番地  
 東京市小石川區久野町百〇八番地  
 東京市小石川區久野町百〇八番地

加野孤雁君編

笑門一案福引種本附一ト

十四版

全一册

洋裝三六判上製  
紙數百五十六頁

正價金拾八錢 郵税金四錢

珍々の趣向に妙々の變化を取り合はしたる福引種本は世の喝采に迎へられて十四版を重ねたり瓢箪より駒の出たるは昔の事、是れは又一本の紙燃糸より鬼も出れば蛇も出る毛むくしやの荒くれ男が匂ひ袋を山程背負ひ込んで唸り出せば羅綺にも堪へぬ嬢様が付け髯の御土産に顔を紅くすると云ふ著者が新奇特な新案それにも上欄に掲げし一口噺は皆是れ一粒選の新題なれば寄る腹の皮の深さは寸にも餘るべしサア／＼みなさん兎角は福の神呼び出しの咒に初子の松ならねど早く引き給へや笑ひ給へやとかく申す。

發兌元 東京本町 博文館

奥村繁次郎君著

家庭に於ける吉凶百談

好評

全一册

洋裝中判美本  
紙數三百八十頁

正價金四拾錢

郵税金六錢

この書は平素家庭に於けるあらゆる禍福吉凶を詳述したるも文章にも分り易く小説面白く且つ珍奇なる挿畫を加へ一目に於て妄説を破り如何なる迷信も迷信の愚なる感じ教育學及び風俗研究の参考書なり何れの家庭に論なく必ず一讀實用的要書なり。

博文館發行

(三)



五段上保申君編

### 明治棋形俗解石立集

全一册和裝菊刷紙  
正價金六拾錢 郵稅金六錢

本書は在來の棋經と全く其選を異にし、収録する處皆是子に終る主として、初學後進に、棋理棋味を會得せしめ、實力を養成するに、勉め一々、着想の善惡を論じ、其着手の適否を説き、講評細密を極め、訓誡叮嚀を盡す、新技に遊ぶ者本實驚あらん、附録棋史雜譚を網羅したる一の日本圍碁史なり、本書は之を得て、錦上更に花を添ふ。

### 新選 圍碁の礎

全一册和裝菊刷紙  
正價金八拾五錢 郵稅金六錢

本因坊秀哉君選  
稻垣兼太郎君著

博文館發行

(五)

高橋忠次郎君 松浦政泰君共著

### 家庭遊戯法

全一册菊刷和裝大和紙表裝  
紙數三百十二頁 挿入  
正價金四拾五錢 郵稅金八錢

著者は家庭遊戯に對して深き趣味を有する人なり、世に遊戯法の著夥多ありと雖も未だ一家揃ふて談笑、嬉遊する好著なきを遺憾として本書を公にせらる。書中收むる處室内遊戯九十七種、室外遊戯四十二種、季節遊戯七十三種、英語遊戯七十種等にして、皆是れ清新高雅なるものを選び而かも簡單にして興味深き理想的遊戯法なり。世の紳士淑女諸君試みに一本を購ふて、春宵秋夜の友とせば、一は以て一家團樂の美風を作り、一は以て修身齊家の道を輔くる多大なるものあらん、天下の家庭此書なくして可ならんや。

日本女子大學教授  
松浦政泰君著

### 世界遊戯法大全

全一册洋裝菊刷紙  
紙數六百六十四頁  
正價金一圓四十錢 小包料金拾貳錢

發兌元 東京市本區本町三丁目四番地 博文館

博 文 館 發 行

○ 白井規矩 ▲ 內外遊戲二百番 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

○ 內山昂君著 ▲ 弓術教範 正價金參拾五錢 郵稅六錢

○ 押川春浪君案 ▲ 壯快室內猛獸射擊 正價金卅五錢 小包八錢 (一冊以五冊計)

○ 高橋迎月君著 ▲ 名家銃獵秘訣 正價金參拾錢 郵稅六錢

○ 鹿野直司君著 ▲ 魚鳥家畜の飼養 正價金四拾五錢 郵稅八錢

○ 前田閑亭君著 ▲ 金魚飼養法 正價金貳拾八錢 郵稅六錢

遊 戲 書 類 目 錄

○ 石井研堂君著 ▲ 釣遊師氣質 正價金九拾九錢 小包料拾貳錢

○ 山島久光君閱 ▲ 新式馬術 正價金六拾錢 郵稅六錢

○ 千葉長作君著 ▲ 日本武道教範 正價金七拾五錢 郵稅八錢

○ 日比野君著 ▲ 武道劍術 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

○ 遠江保君編 ▲ 西洋魔術 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

○ 編輯局編 ▲ 秘術傳法 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

259  
707

### 遊戯書類目錄

○ 小林健太郎著 ▲ 初學圍碁活法 正價金六拾五錢 郵稅六錢

○ 平田純一郎著 ▲ 圍碁と將碁 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

○ 宮益農學士著 ▲ 家庭園藝術 正價金八拾錢 小包料八錢

○ 江原春夢君著 ▲ 盆景盆石秘訣圖解 正價金參拾錢 郵稅六錢

○ 中島信義君著 ▲ 草木盆栽仕立秘法 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

○ 博文館編輯 ▲ 茶の湯と生花 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

